

酒田市における
放課後学習支援に関する調査研究

平成 28 年度 大学まちづくり地域政策形成事業
研究成果報告書

2017 年 2 月

研究代表者 國眼眞理子

(東北公益文科大学・公益学部公益学科・教授)

●研究課題名 「酒田市における放課後学習支援に関する調査研究」

●研究種目：大学まちづくり地域政策形成事業

●研究期間：平成28年6月1日～平成29年2月28日

●研究代表者

國眼眞理子（東北公益文科大学・公益学部公益学科・教授）

●研究分担者

狩野 晃一（東北公益文科大学・公益学部公益学科・准教授）

白旗 希実子（東北公益文科大学・公益学部公益学科・講師）

●学生メンバー

井上 清菜（東北公益文科大学・公益学部公益学科・4年生）

本間 亮平（東北公益文科大学・公益学部公益学科・4年生）

大泉 春風（東北公益文科大学・公益学部公益学科・3年生）

菊地 由浩（東北公益文科大学・公益学部公益学科・3年生）

須藤 洋祐（東北公益文科大学・公益学部公益学科・3年生）

三上 陽香（東北公益文科大学・公益学部公益学科・3年生）

横山 広太郎（東北公益文科大学・公益学部公益学科・3年生）

皆川 未希（東北公益文科大学・公益学部公益学科・2年生）

今井 奏（東北公益文科大学・公益学部公益学科・1年生）

亀谷 千香子（東北公益文科大学・公益学部公益学科・1年生）

齋藤 鈴（東北公益文科大学・公益学部公益学科・1年生）

柴田 雪乃（東北公益文科大学・公益学部公益学科・1年生）

成澤 友基（東北公益文科大学・公益学部公益学科・1年生）

渡部 千南（東北公益文科大学・公益学部公益学科・1年生）

●交付額 400,000円

<目次>

はじめに	國眼眞理子・・・5
第1節 本研究の目的と方法	
第2節 調査研究に関わる活動	
第1章 「夏休み宿題お手伝い教室」活動報告	白旗希実子・・・9
第2章 「英語を自分のものにする3日間～英検3級突破を目指して」の活動報告	狩野 晃一・・・17
第3章 「放課後学習支援」活動における大学生の学習効果と課題	國眼眞理子・白旗希実子・・・19
第1節 問題背景と先行研究	
第2節 東北公益文科大学の学習ボランティアの実施体制	
第3節 活動において学生が学んだこと	
第4節 活動形態による学生の学びの特徴と全体に共通して実感される学習効果	
第5節 学生の活動に関する最終報告	
第6節 放課後学習支援活動に参加した学生の活動終了後アンケート結果	
第4章 教育支援活動の実施体制とそのサポート方法についてのヒアリング調査	白旗希実子・國眼眞理子・・・56
第1節 調査概要	
第2節 A大学におけるヒアリング調査の結果	
第3節 B大学におけるヒアリング調査の結果	
第5章 地域課題解決フォーラムにおける発表	白旗希実子・・・68
引用文献・参考文献	・・・74

<資料>

資料1：「中学生対象英語力パワーアップ講座」の様子	・・・76
資料2：「放課後学習支援」の活動風景	・・・78
(1) A中学校における活動風景	
(2) B中学校における活動風景	
資料3：第四中学校の活動において学生が作成した「授業案」の一例	・・・83
(1) 国語の授業案（授業者：金田直）	
(2) 数学の授業案（授業者：須藤洋祐）	
(3) 英語の授業案（授業者：本間亮平）	

はじめに

第1節 本研究の目的と方法

1. 目的

近年県内各地域のみならず全国各地の自治体において、大学生による放課後学習支援活動が活発に展開されている。ことに経済的な格差が教育格差を生み出しているという危機感から、福祉的支援としての学習支援活動が広がりを見せている（山形新聞、2016/05/23）。当酒田市内においても、学習に対する意欲はあっても保護者の就労状況や経済的な状態等の制約から、放課後学習が十分とはいえない児童生徒が存在だろうことは想像に難くない。

昨年度実施された平成27年度全国学力・学習状況調査報告書〈質問紙調査〉（文部科学省）の結果によれば、中学校3年生の数学の場合を例に挙げると、91.6%の生徒が「数学ができるようになりたい+まあそう」思うと答え、82.7%が「数学の勉強は大切+まあ大切」と答える一方で、実際の学習理解状況を表す「数学の授業の内容はよくわかる+まあわかる」は71.7%、「好き+まあ好き」は56.2%とその値は決して高くない。「大切」な科目であり「わかるようになりたい」と思いつつも、必ずしもそれが実現していない現実が存在している。

本研究は、これまで東北公益文科大学と酒田市立酒田第4中学校が連携して実施してきた4ヶ年にわたる「学習ボランティア活動」をベースにしながら、かならずしも経済的な視点からの支援に限定せずに、学びたい児童生徒に多様な学習機会を提供しそのあり方を検討することを目的に、実践と調査を行った。実践を進めながらその課題を探るとともに、それらと平行して同様の放課後学習支援を行っている他大学の事例について聞き取り調査を行い、活動の成果を上げるための方策を検討したものである。今年度は市内の公立中学校2校を活動の場とし、いずれの場合も補習授業として位置付けて実践を試みた。併せて後述するように学生の学習支援の形態は2校でそれぞれ異なるため、方法の違いによって、支援する学生の側にどのような気づきや効果がもたらされるのかも検討課題とした。

また本研究では、他の地域で行われているような学校以外の地域の施設を用いた学習支援という形をとらなかったが、これは少子化に伴う生徒数の減少から中学校の統合が進み、学区域がかなり広いことから、生徒が通学する中学校を活用するほうが、生徒の放課後学習の支援ニーズに応じやすいのではないかと考えられるからである。具体的な活動としては、次節に掲げた調査ならびに事業を展開するものである。

2. 方法

上記の目的を達成するために、本調査研究では、酒田市内の小中学生を対象にした以下の3事業に取り組み、児童生徒の学力向上に向けた効果と運営上の課題を検証した。いずれも酒田市教育委員会と東北公益文科大学の連携事業の一環として実施したものである。

- ①中学生の放課後学習支援（9月～1月の予定）
- ②夏休み宿題お手伝い教室への参加（8月上旬）
- ③中学生対象英語講座 講座名「英語を自分のものにする3日間 ～英検3級突破をめざして～」（8月上旬）

さらに以下の方法によって、学習支援事業に関わる調査研究を実施する。

- ①東北地域において運営されている放課後学習支援事業を中心とする学習支援活動の実態を把握す

- るために、当該地域へ出向き、その運営主体との意見交換を行う
- ②東北地域以外の実践例について文献研究を行う

3. 学習支援事業の内容

①市内中学校における放課後学習支援活動

- ・対象：中学校3年生とし、英語・数学等の教科を中心に学習支援を行う
- ・実施時期ならびに実施回数：9月～翌年1月、週1，2回実施予定
- ・実施校との協力：

協力校とのスケジュールを調整の上、その校舎内で実施する。その他支援方法については随時協議の上、実施する

②夏休み宿題お手伝い教室への協力

- ・退職公務員連盟酒田飽海支部が実施する学習教室に学生が参加する

③中学生対象英語講座

- ・対象：英語力を向上させたいという意欲のある中学生
- ・会場および日程：東北公益文科大学を会場に3日間の日程で実施
- ・指導：本学国際教養コースを担当する教員が指導に当たり、留学経験のある学生が支援に当たる

第2節 調査研究に関わる活動

年月日	内容	備考
H28.01.07.	酒田市教育委員会と東北公益文科大学の連携事業に関する協議	酒田市教育委員会企画管理課、 國眼、白旗
H28.04.12.	連携事業打合せ（第1回）	酒田市教育委員会企画管理課、 社会教育文化課、政策推進課、 國眼、白旗
H28.05.17.	酒田4中事前協議	酒田4中（校長・島田教諭） 東北公益文科大学
H28.05.19.	連携事業打合せ（第2回）	國眼・白旗・狩野 酒田市教育委員会企画管理課
H28.05.31.	連携事業打合せ（第3回）＜予算・広報等＞	國眼・白旗 酒田市教育委員会企画管理課
H28.06.01.	放課後学習支援（学習ボランティア）募集開始 第1回募集（～6/17）、第2回募集（～7/4）	
H28.06.10.	学習ボランティア活動学内説明会（公益ギャラリー）	昨年度4中学習ボランティア参加学生による説明会 昼休み
H28.07.12.	連携事業打合せ（第4回）	酒田市教育委員会企画管理課、國 眼・狩野・白旗
H28.07.15.	夏休み宿題お手伝い教室参加学生対象説明会 （於：東北公益文科大学）	酒田市教育委員会社会教育文化課 参加学生 東北公益文科大学
H28.07.21. &07.27.	登録学生への説明会（昼休み）	参加希望学生
H28.07.22.	酒田1中学習ボランティア打合せ	酒田1中（校長、教員） 酒田市教育委員会企画管理課 参加学生、東北公益文科大学
同日	酒田4中学習ボランティア打合せ	酒田4中教員（島田教諭） 國眼・白旗
H28.07.27.	放課後学習支援参加学生対象 打ち合わせ会	参加学生、國眼・白旗
H28.08.05.	夏休み宿題お手伝い教室（総合文化センター）	参加学生（4名）
H28.08.08. ～.08.10.	「英語を自分のものにする3日間～英検3級突破 をめざして～」（於：東北公益文科大学）	狩野、学生（1名） 酒田市教育委員会企画管理課
H28.08.19.	酒田1中学習ボランティア直前打合せ	酒田1中教員、酒田市教育委員会企 画管理課、学生代表
H28.08.26	酒田4中学習ボランティア開講式&第1回学習会	酒田4中教員 酒田市教育委員会企画管理課、酒田4 中担当学生、東北公益文科大学

H28.09.02	酒田 1 中学習ボランティア開講式	
H28.10.12.	本連携事業の実施状況と来年度に向けて	酒田市教育委員会企画管理課 國眼・白旗・狩野
H28.11.14.	放課後学習支援に関する聞き取り調査（於：東北文教大学 教職実践センター）	國眼・白旗
H28.11.25.	「学校ボランティア」に関する聞き取り調査（於：東北大学）	國眼・白旗
H28.12.03.	地域課題解決フォーラム「酒田市における放課後学習支援」報告（於：東北公益文科大学）	実践報告（白旗希実子・大泉春風・金田直・菊地由浩・須藤洋佑・本間亮平・横山広太郎）
H28.12.09.	酒田 1 中活動最終日	
H29.01.27.	酒田 4 中活動最終日	
H29.02.03.	放課後学習支援活動の総括および来年度に向けて	酒田市教育委員会企画管理課 國眼・白旗
同日	酒田 4 中にて本年度の活動総括	酒田 4 中教員 酒田市教育委員会企画管理課 学生（4 中担当） 東北公益文科大学

第1章 「夏休み 宿題お手伝い教室」における活動報告

2016年8月1日から8月5日まで、酒田市では、「退職公務員連盟酒田飽海支部と連携を図り、東北公益文科大学学生のサポートを得て夏休みの宿題学修の支援を行なうことにより、子どもの居場所づくり、仲間づくりを行う」ことをねらいとした、平成28年度「夏休み、宿題お手伝い教室」が実施された。対象となったのは、酒田市、遊佐町、庄内町、三川町に在住の小学校4年生から6年生の児童で、総合文化センター、里仁館、日向コミュニティーセンターの3会場で開催された。

このうち、東北公益文科大学の学生は、8月5日（金）に酒田市総合文化センターにおける活動に参加した。参加者は、井上清菜（4年生）、金田直（3年生）、菊地由浩（3年生）、皆川未希（2年生）の4名である。活動時間は、午前9時から11時30分であった。なお、事前に社会教育文化課の職員らが、大学を訪れ、学生たちへ説明会を実施している。

具体的な活動内容は、それぞれ担当する学年を決めて、「退職公務員連盟酒田飽海支部会員の指導を子どもたちと一緒に聞き、考え方や解き方を理解して、答えの確認や簡単なアドバイスをする」ことで、「分かる喜びや勉強の楽しさ」を感じさせてほしいとのことであった¹。また、休憩時間において、「異なる学校の子どもたち同士のつながり」を深めることも内容として含まれていた²。

大学の春学期の定期試験の日程と重なったため、1日のみの参加となったが、子どもたちの交流や、退職教員の先生方の指導の仕方をじかに感じるなかで、教えることの難しさを感じたり、教えることの工夫の仕方を自分なりに考えてみたりと、学生たちにとって充実した活動となったようであった。

次ページからは、参加した4名の学生による報告書である。

学生の活動をサポートしてくださった、退職公務員連盟酒田飽海支部の先生方、社会教育文化課の職員の方々、そして参加された小学生の皆さんに感謝を申し上げたい。

¹ 社会教育文化課「「夏休み 宿題お手伝い教室」への協力のお願い」（説明会配布プリント）。

² 同上。

○活動内容

事前に夏休み宿題お手伝い教室への参加を希望した小学生の、夏休みの宿題のお手伝いをする。退職された小学校の先生方を中心に、大学生も参加した。小学生は4年生、5年生、6年生の3学年でそれぞれ机を分けて指導を行った。教科は決まっておらず、児童がやりたいものを指導した。教科書は準備されており、教科書を確認しながら指導を行うことができた。学習の間の休憩では、生徒と折り紙をした。生徒との距離も縮まり、とても楽しい活動であった。

○夏休み、宿題お手伝い教室に参加した理由

私は小学校教員を目指している。夏休み、宿題お手伝い教室は小学生を相手に学習を教えるとともに、退職された小学校の先生方とともに活動できるため、参加を希望した。先生方の指導を間近で見学でき、また日ごろ経験のない小学生への指導ができたことは、小学校教諭を目指す私にとって、良い経験になった。

○学んだこと、気づいたこと

私が担当したのは4年生の女の子で、マンツーマンで宿題のサポートをした。最初に算数に取り組んだのち、漢字学習に切り替えた。このように教科を切り替えることで、長い時間の学習も集中して行うことができているようである。漢字は得意分野であり教えることも少なかったが、わからない問題は頼ってくれた。また、国語辞書を持ってきて、調べる様子も見られた。いつもの授業時間よりも長い時間の学習であったため、児童が飽きない工夫をしていると感じた。また、間の休憩を存分に楽しみ、後半の学習にはさらに集中する姿が見られた。小学生は休憩をはさみながら、集中して学習を進める工夫する必要があると感じた。

○参加してみて難しかったこと

一番悩んだのはどこまで教えてよいのかということである。生徒は必死に思い出そうとしているため、私が必要以上に教えてしまっただけではいけないと思った。だが、手が止まっていると、すぐに教えてしまうこともあり、もう少し考えさせることを大切にしたいと思った。今回は1日のみの参加になってしまい、数時間しか児童と関わることができなかったが、もう少し時間があつたら、児童とより深く関わることはできたのではないかと感じた。

○参加経験を今後の学生生活にどのように活かしていきたいか

私は教職課程を履修しており、11月に教育実習を控えていた。教育実習は中学校だったが、児童と関わったり、退職された先生方の教える姿を見たりすることは、とても勉強になった。学生生活ではないが、私は将来小学校教諭になりたいと思っているため、実際に児童と関わり、学習のサポートをする機会によって、小学校の先生になりたいという思いがより一層強くなり、とてもよい経験になった。どのように教えればよりわかりやすいのかと考えることも、今後の教育実習や将来の夢に活かせると思う。

○お世話になった方への謝辞

先生方、児童のみなさんありがとうございました。

○後輩の学生へのアドバイス

数時間のサポートだったため、あまり工夫をした点はないが、夏休み宿題お手伝い教室は休憩の時間が設けられていて、折り紙をしたり、紙飛行機づくりを楽しんだ。その時間は、児童の表情もほぐれ、楽しくスキンシップする機会となった。勉強を教えるうえでは話すことのできない会話ができるため、生徒との距離が縮まったように思う。話をすることでなついてくれて、休憩後の勉強も信頼関係をもって臨むことができる。大学生も小学生と一緒に休憩しながら、楽しむことが良い学習効果をもたらすと思う。

○活動内容

- ・酒田市内の小学生（小学4年生～小学6年生）の夏期休暇課題のお手伝い

○宿題お手伝い教室に参加した理由

私が宿題お手伝い教室に参加した理由としてはたくさんある。しかし、今回は2つに絞る。1つ目に「教員」になるために必要な知識を養いたいと思ったから。2つ目に子どもが好きであるということが理由である。

○学んだこと、気づいたこと

参加して、学んだことや気づいたことは多い。元教員の先生からは、「児童に対して教え過ぎてはいけない。ただヒントをあげるだけ」というようにと、最初に言われた。この時に、「答えを教えることはいくらでも出来る。答えだけ教えても意味がない。やり方を教えてあげないといけない。」ということに気づいた。そして、小学生はとても素直であり、私たちが普段使っている言葉を使うと、それを真似をしてしまい、悪影響を及ぼしかねないということも学ぶことが出来た。

○自分なりに工夫したこと

普段はアルバイトで、中学生や高校生を指導しているが、小学生を指導することははじめてであったので、大変だったが、自分なりに工夫したことは、具体例を用いることである。今の小学生に人気のものを聞き、それを使いながら指導をしていったことである。

○参加してみて難しかったこと

難しいと思ったことは、「指導すること」つまり「教える」ということが難しいことがわかった。私は、普段は塾講師のアルバイトをしており、中学生をメインに指導しているために「教える」ということに対しての抵抗はなかった。しかし、小学生に対して教えてみると、今までとは勝手が違うことを痛感した。あとは、小学生とのコミュニケーションの取り方である。私たちが、小学生だったころと今の小学生では、興味関心が異なる。そのために、どういった話をすればいいのか分からなくなってしまうことが多々あった。小学生とコミュニケーションが取れば、そのあとの勉強を教えるのにもスムーズな流れで進むと出来るのではないかと思う。この「教えること」と「コミュニケーションを取ることは、意外に難しいことだった。

○参加経験を学生生活にどう生かしていくか

今回、参加して学んだこと、気づいたことはたくさんある。この学んだこと、気づいたことは、今後私が「教員」になるうえで大いに糧になった。

これからもこのような機会があれば、積極的に、自分の糧にしていきたい。

○謝辞、後輩の学生へのアドバイス

今回、お世話になった方々には感謝に言葉しかありません。おかげでより多くのことを学ぶことが出来ました。この経験が無駄にすることなく、自分の糧にしていきたいと思います。これから、参加する学生には、「教える」ことはもちろんだが、それにだけ固執するのではなく、「小学生と一緒に勉強する」という構えでおこなうと、児童ともコミュニケーションも取りやすいのではないかと思う。話すことがなくなると児童たちも飽きてしまうので、様々な話のネタを持っていくと楽しくできるのでないかと思う。

○活動内容

夏休みお手伝い教室は、酒田市内の小学生を対象として夏休みの宿題を一緒に考えながら進めていく企画である。辞書や各小学校の教科書、それぞれの参考書は先生方が準備をしてくださった。各学校の先生方や酒田市の教育委員会の方が参加し、そのサポーターとして私たち大学生が参加した。

学習時間の合間には休憩時間が設けられ、その際に先生方と小学生と大学生が一緒になり、折り紙を行った。

○学んだこと、気が付いたこと

私がまず感じたのは、いつも接している大学生や学ボラで接している中学生とのちがいである。小学生は私たちでは気づかない事柄にも気づき、それを探求する。つまり、知的好奇心が強い。

また、小学生は自分が思っている以上に、メリハリが付けられることにも驚かされた。小学生は自発性が育ってくる時期である。自分たちで時間を見て行動することが出来ていた。

○自分なりに工夫したこと

私は今回の夏休みお手伝い教室に参加するにあたり、特に国語に関する知識の再確認を重点的に復習した。具体的に言えば、国語の文章題について何を聞かれていてどのように答えればよいのかについてである。また、漢字についても書き順や「トメハネ」なども間違えた字で書いてしまうと、小学生もそのまま覚えてしまう危険性があるので注意しながら復習した。

○参加してみて難しかったこと

私は学ボラを通して中学生と交流しているが、小学生は交流したことは少なかった。そのため、どのようにコミュニケーションをとったら良いのかが分からず少し困った。その際には先生方の様子を見させていただきながら、小学生とのコミュニケーションをとり、交流を図った。

○今後の活動にどのように活かしていきたい

私は教員を目指しており、教員採用試験も受験しようと考えている。そのため、今回の夏休みお手伝い教室で小学生とコミュニケーションを取り、授業に活かしていくスキルや、コミュニケーションの取り方や関わる際の心構えも学ぶことができた。これは、将来教員になった時だけでなく、一般企業へ就職したときにも必ず必要となるスキルであると思うので今回の体験は私にとって非常に意義のあるものとなった。

○お世話になった方への謝辞

お誘いいただいた先生方を始め、酒田市教育委員会の皆さま、各学校の先生方、ありがとうございました。

夏休み宿題お手伝い教室に参加して

皆川 未希

○活動内容および参加理由

私は教育に興味があるので、教職課程を受講しています。そして、子どもと関わるのが好きなので2016年8月5日（金）午前で開催された夏休み宿題お手伝い教室の最終日のみに参加しました。大学の試験日程と重なっていたため、1日のみの参加になってしまったことが残念でした。当日の活動内容は、小学生の夏休みの宿題を一緒に取り組むことで、会話を通してコミュニケーションをはかりました。集中力が続かなくなってきた児童には宿題に楽しく取り組めるように声掛けをして促したりしました。

○学んだこと、気づいたこと

退職教員の先生方から学んだことはいくつかあります。まず児童への接し方です。わたしは自分の話を一方的にするのではなく、子どもたちの話を聞くことに気を付けました。子どもたちと夏休みの宿題の状況や家での過ごし方など、たくさん話すことができたので、緊張することなく楽しく宿題のサポートに取り組みました。

次に児童が問題につまずいているときのヒントの出し方です。わたしは先に答えをすべて言うてしまうのはあまり良くないと思っています。教える側は、気付くきっかけになるような声掛けをすることで児童本人に気付いてもらえるような導き方をすべきだと考えています。そこで、どのように声掛けをすれば子どもの達成感に繋がるのかを考えながら、退職教員の先生方の言動と子どもたちの反応を観察しました。

○自分なりに工夫したこと

参加してみて難しかったこともありました。わたしは小学6年生の児童を数名担当させていただきましたが、その中の1人は中学1年生の数学の問題を解き進めていました。内容的には問題ありませんでしたが、彼が先取りして個人で進めていることもあり、細かいミスが多くみられました。間違っている箇所は指摘するべきだとは思いますが、あまりにも多く言うと本人のやる気を削いでしまうことにならないか不安に感じたので、慎重に声をかけるように努めました。

○参加してみて難しかったこと

休憩時間には折り紙をみんなで折って遊びました。作るのが難しい立体のコマを担当しましたが、分かりやすく教えるのが大変でした。児童によって理解する速さも丁寧さも異なっていたので、間違ってしまった児童の修正と同時に進めるのがむずかしかったです。

また、小学生を見ていて気付いたのですが、普段は折り紙やコマなど昔の遊びに触れることがあまりない様子でした。子どもたちにとって非日常の珍しい体験ができたことに嬉しさを感じるのと同時に、現代の小学生の日本文化との距離に驚きもありました。

○今後の活動にどのように活かすか

次にこの参加経験のこれからの活かし方についてです。私は普段塾講師のアルバイトをしてお

り、中学生と高校生に数学をメインに教えています。しかし小学生と関わることは少ないので、今回の宿題お手伝い教室は貴重な経験になりました。中学生と違ってまだ幼さが残っていたので、難しい話し方ではなく気軽に会話が弾むような声のかけ方をするようにしたりして、相手の気持ちを考えながら行動できました。これからも児童それぞれの特徴や年齢などに考慮して対応していきたいと考えています。

第2章 「英語を自分のものにする3日間～英検3級突破を目指して」の活動報告

「英語を自分のものにする3日間～英検3級突破を目指して」

実施日時 8月8日～10日（3日間）午前9時～12時まで

実施場所 公益研修センター 中研修室2

講師 狩野晃一（東北公益文科大学 准教授（国際教養コース主任））

参加者 市内中学生

■概要

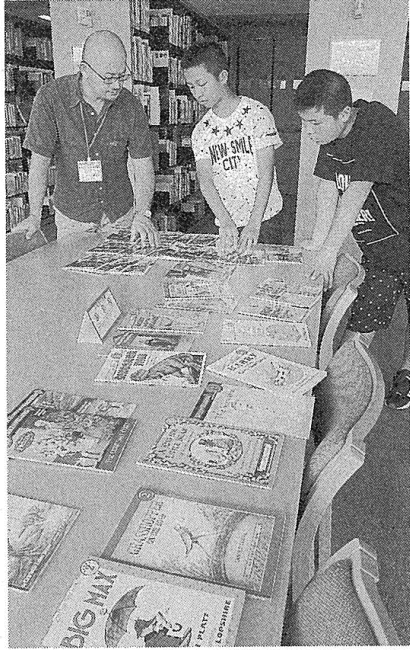
英検にも使える英語での積極的なやり取りを行う姿勢を身につけることを目標とした。特にリスニング、リーディング、スピーキング3技能の向上を目指した。21名の参加希望があり、19名が実際に講義に出席した。当初の案では1日のうちに3技能をバランスよく織り交ぜて進めるつもりであったが、生徒たちの雰囲気はまだ硬く、スピーキングの練習は後に回すことにした。日が進むにつれ、お互いに自由に話すことができるようになってからも英語を発音することにはやや抵抗があるように見受けられた。一般的に受動的と捉えられるリーディングであるが、理解できるレベルの英文を多く読み進める多読という学習法はできるだけ多くの英語をインプットする能動的な活動である。こちらの方が今回参加した生徒には適当であると考え、急遽図書館での多読授業となった。生徒たちは様々なレベル、多岐にわたる内容を持つ多読教材を各々手に取り、興味の赴くまま読み進め、英語を読むことを楽しんでいるように見えた。またリスニングとスピーキングについてはマザーグースの詩を用いてリズム、英語特有の音のつながり、アクセントの強弱などに注意しながら学習した。「普段学校ではやらない方法で色々と学べたのは良かった」という意見を残してくれた生徒もいた。受験や資格も大切であるが、英語そのものの面白さや、これから教養として勉強を続けるヒントなども盛り込んだ。

■改善点等

講師が初めて中学生に対する企画に携わったこともあり、彼らの英語能力、英語習得の意識の程度、講師とあるいは生徒間の心理的距離など、明らかではない点が多くあった。このことから用意してあった教授内容を削除、変更せざるを得なくなった。次回からは導入部分をより丁寧に行い、講義の意味や方法論についての理解が浸透するよう努めたい。

「多読」などで英語楽しく 酒田市教委と公益大 中学生向けに講座

酒田市教育委員会と東北公益文科大の連携による中学生向け英語講座が8-10の3日間、市公益研修センターで開かれ、市内の中学生約20人が同大の



多読用テキストは「アナと雪の女王」「スノーマン」など親しみやすいもの。狩野准教授（奥左）のアドバイスで選ぶ中学生たち=9日

狩野晃一准教授の指導で、歌を歌いながらのアクセント学習や「多読」など、中学の授業とは異なるプログラムで楽しく英語を学んだ。昨年9月に就任した丸山至市長は「公益大との連携」を重点施策に掲げており、今回はその一環で開催。「英語を自分のものにする3日間」をテーマに、1日3時間ずつ計9時間で、4つのスキル（聞く、話す、読む、書く）を養った。

2日目の9日は、英検対策でイラストに描かれているものを英語で表現したり、英語特有の発音方法を詳しく聞いた後、英国の童謡「ロンドン橋」を歌い、英語のリズムやアクセントへの理解を深めた。さらに欧米の幼児向け絵本など、各自の能力の範囲内で読める本をひたすら読んで感覚的な読解力を養う「多読」に取り組んだ。

「歌を歌ったり、たくさん本を読んだり、学校とは違う新しい英語に触れている感じで面白いと話した。狩野准教授は「自分から情報を取りに行くなど、能動的な英語の力を養う活動に入れていく。なぜ英語を学ぶのかというモチベーション（意欲）についても考え、自覚してもらうようにしたい」と話した。

酒田六中3年の伊藤稜真君（14）は「英語が好き。学校と違い、発音などを詳しく学べてとても楽しい」、同1年の植村衛君（12）は

※活動の様子は資料参照のこと

第3章 「放課後学習支援」活動における大学生の学習効果と課題

第1節 問題背景と先行研究

文部科学省および厚生労働省関係局長から、各大学・各都道府県委員会教育長ら宛に「学習支援における学生ボランティアの参加促進について（依頼）」が出されるなど、政策的にも学生ボランティアへの関心が高まっている。

現在、学習支援ボランティアに関係する事業は、「学校・家庭・地域の連携協力推進事業」（文部科学省）、「子どもの生活・学習支援事業」（厚生労働省）、「生活困窮世帯等の子どもに対する学習支援事業」（厚生労働省）、地方公共団体や地域のNPO等が独自におこなう取り組みなどなど多様に展開されている。

また、その実施形態も、a) 各学校と大学との間の学校間連携でおこなわれるケース、b) 教育委員会などの教育行政機関と大学との連携によっておこなわれるケース、c) 福祉関係の行政機関と大学との連携によっておこなわれるケース、d) NPOが学生の登録を行い、行政や学校等から活動依頼を受け、両者を調整するケース、e) 各団体、各自治体からの募集に対し学生が個別登録するケースなど、多様となっている。後述の東北公益文科大学の実践のケースは、昨年までがa)のケース、今年度からがb)のケースに該当する。

大学生が学校においてボランティア活動を行う意義については、瀬戸（2012）によると、「地域の小・中学校における「開かれた学校づくり」の一環を担う活動」、「教職課程を履修する学生の教育現場体験の機会の確保」という意義があると指摘されている。また、入江（2014）は、「学校ボランティア」10年の歩みのなかで、学生スタッフが学生のボランティア活動のコーディネーターの役割を果たし、「学生たちが「自分たちで学びあう」ことができるコミュニティを形成するサポート」をしており、学生やコーディネーターなど、それぞれのコミュニティにおける「学び」が重なり合って、取組全体が「学びあうコミュニティになっている」と述べている。そのほか、姫野（2006）は、活動形態の違いによって学習効果に違いあることを明らかにしており、「授業補助がある場合は、授業の進め方やつまづきへの対処法等に関する幅を広げるといった点で効果がある一方、授業補助がない場合は、教職の責任感や自分なりの指導スタイルといった教師としての考え方を深めることに効果」があることを明らかにしている。

その一方で、学生ボランティアの課題として、阪根（2006）は、「送り出す側と受け入れる側の責任問題をどう考えるか」が大きな課題と指摘している。また、瀬戸（2012）は、大学側も学校側も教員がボランティア・コーディネーターの役割を兼務している状況であり、「『学校地域支援本部』等の組織体制を整備しボランティア・コーディネーターを中心とした活動の調整が必要になる」と思われると指摘している。

以上のように、大学生の学習支援活動に関連する国の施策及び実施形態は多様に展開しており、学生の参加形態、学生のキャリア展望によって、学生にとっての意義も異なる可能性が考えられる。また、大学と学校の連携のあり方によってもその課題は異なってくるだろう。そのため、地域（酒田市）の実情（ニーズ）と学生のキャリア展望に応じた学生ボランティアのあり方を模索する必要がある。

第2節 東北公益文科大学の学習ボランティアの実施体制

東北公益文科大学では、2012年にB中学校にて学習ボランティア活動（通称「学ボラ」）を開始（無償）した。実施形態は、B中学校と東北公益文科大学との学校間連携という形であった。今年度からは、教育委員会企画管理課との連携を開始し、A及びB中学校での学習ボランティア活動を開始（有償）した。

（1）登録学生の内訳

本年度の登録学生は15名である。そのうち、中学校における放課後学習支援への参加者は14名で、A中学校の活動に9名、B中学校の活動に8名（兼任有）が参加した。登録者の学年の内訳は、1年生が6名、2年生が1名、3年生が6名、4年生が2名である。活動日は、原則週1日で、金曜日に実施した。

（2）登録学生の募集

登録学生の募集は、春学期のガイダンスにおけるアナウンス、学内掲示、教職課程のメーリングリストで案内を送った。また、昨年度にB中学校において活動をしていた3年生を中心に6月10日（金）の昼休みに学内で説明会を開催し、興味のある学生と3年生の学生が話し合う機会を設けた。学生同士が質問し合える機会を設けたことで、登録を考えている学生の活動への不安が解消された様子がみられたため、今後もできる限りそういった場を設けていくことが重要と思われる。なお、募集の対象者は、「継続的に活動に取り組むことができる公益大生」とした。

登録希望者は、大学の事務局で書類を受け取り、申し込む。書類は、教育委員会へ送られ、登録が完了する。そのプロセスにおいて、教員は説明会に参加していない学生などを対象に、必要に応じて登録を希望する学生と面談を実施した。なお、登録者は、メーリングリストへの登録、学内での勉強会への参加、報告書の提出が義務づけられている。

（3）登録学生への説明会

登録者がある程度集まった段階で、メンバーを集めて、顔合わせと活動に関する説明会を7月21日（木）、7月27日（水）の12時半から開催した。内容は、必要書類の配布、説明（メンバー表の配布、メーリングリスト、学ボラ共通アドレスのお知らせなど）、顔あわせ、打ち合わせである。事務的な説明を教員から、活動内容についての説明を昨年度の活動メンバーからおこなった。その際に、派遣先の決定と各学校で活動を行う学生のなかからリーダー、副リーダーを決定した。

（4）リーダーの役割

各リーダーは、各学校の教員との直接的にやり取りし、登録学生への連絡調整をおこなう役割を担っている。第1回目の活動前には、A中学校およびB中学校の担当教員とリーダーの事前打ち合わせを行った。なお、学生同士の連絡調整については、主にSNSやメーリングリストなどの手段を用いたが、ネット上のやり取りだけではなく、定期的にミーティングを行う、学習ボランティア専用の連絡用ホワイトボードを設置するなど、他によい方法がないかどうか模索することが今後の1つの課題である。

（5）実施状況

A中学校における活動日は、9月2日（金）、9日（金）、16日（金）、23日（金）、30日（金）、10月14日（金）、10月28日（金）、11月4日（金）、18日（金）、25日（金）、12月2日（金）、9日（金）の全12回で、参加した生徒は約25名であった。担当させていただいた教科

は数学（主に基本計算）で、放課後学習の時間において、各生徒が、中学校の教員が用意したプリントによる学習を各教室でおこなっている際に、生徒からの質問や疑問に答えることが学生の主な活動である。放課後学習に参加している生徒は、中学校三年生で、各教室には2名程度学生が配置されるという形式であった。学習プリントは、お忙しいにも関わらず、先生方から事前に教育委員会を通して学生へ送っていただいた。そのため、学生たちは予習をした上で活動に臨むことができた。

B中学校における活動日は、8月26日（金）、9月2日（金）、16日（金）、23日（金）、30日（金）、10月14日（金）、10月28日（金）、11月4日（金）、18日（金）、25日（金）、12月2日（金）、9日（金）、16日（金）、1月13日（金）、27日（金）の全15回で、参加した生徒は約35名であった。B中学校の実施形態は、昨年度まではプリント学習形式であったが、今年度は学生が作成した資料（プリント）を用いて授業を行う形式となった。学生たちは、授業をおこなう授業者（1名）と、生徒たちの学習活動を見守り、質問や疑問に答えるサポーター（5名）とで活動をおこなった。学習会終了後には、生徒との個別質疑応答をおこない、担当教員と反省会を実施している。活動場所は、B中学校の図書館で、中学校3年生の希望者が学習会に参加している。彼らが資料を作成し、授業を行った教科は、国語（現代文、古文、漢文）、英語、数学、社会であり、教職希望の学生がそれぞれ得意とする教科を担当した。

第3節 活動において学生が学んだこと

学生らは、活動の振り返りとして、中間報告書の作成（11月18日〆切）、地域課題解決フォーラムでの発表（12月3日：第5章参照）、最終報告書の作成（1月20日〆切）をおこなった。学生たちには、（1）タイトル、（2）学籍番号・氏名、（3）活動している中学校とこれまで参加した日時・教科、（4）活動内容、（5）学んだこと、気がついたこと、（6）自分なりに工夫したこと、（7）参加してみて難しかったこと、（8）これまでの活動を振り返り、今後の活動にどのように活かしていきたいか、到達目標などの項目を中心に報告書を執筆してもらっている（本章：第4節を参照のこと）。

彼らが学んだことは、A中学校グループでは、①事前準備の大切さ、②個別対応の大切さ、③答えを教えるのではなくではなく考え方・解き方を教えることであり、B中学校グループでは、①生徒側の立場で分かりやすい資料を作成する技術、②生徒間での教えあいの大切さ、③授業後に行う反省会（10分程度）、④事前準備や教材研究の大切さ、⑤生徒のニーズに沿った授業資料づくりなどであった。

各グループに工夫した点をあげてもらったところ、A中学校グループの学生は、①生徒の目線に立つこと、②信頼関係を構築するためにコミュニケーションをとること、③積極的に話しかけることなど、生徒とのコミュニケーションのとりかたなどに関する項目があげられた。その一方で、B中学校グループの学生は、①生徒の習熟度に合わせた教材を作成すること、②難しい専門用語を使わない、また説明を加える、③プリントの枚数は2枚程度にまとめる、④教材研究に時間をかけ、内容を把握するなど、教材づくりや授業の展開方法などについての項目を挙げられた。これは、活動形態の相違から、学生が得た学習効果に違いが生まれていると考えられる。

今後の課題として挙げられたのは、A中学校グループの学生では、①学校側との連携強化、②数学以外の教科にも挑戦する、③メンバー間の連携強化、④参加メンバーの把握である。B中学

校グループの学生からは、①わからない生徒や私語をしてしまう生徒への対応の仕方、②質問したいが出来ない生徒などへの対応、③学生と生徒との壁を作らないためにどうしたらよいか、④習熟度にバラつきがある場合の支援方法などであった。

第4節 活動形態による学生の学びの特徴と全体に共通して実感される学習効果

A 中学校の活動形態は、自主的に学習を進める個々の生徒に対して学生が支援する「個別学習支援型」がメインであったが、時々「総合的な学習の時間」における生徒の自主学習を支援する「授業補助型」の支援に参加する形であった。こうした活動形態において、学生たちは、(1) 個々に応じた学習支援の方法を学ぶこと、(2) 生徒とのコミュニケーションの取り方を密に学ぶことができた。なかには、同じメンバーが同じ時間に学習支援に訪れることは、生徒側の安心感にもつながっているのではないかという実感を得た学生もいる。生徒とのコミュニケーションについて学ぶことができるという点が特徴的な学習効果としてあげられる。

一方B 中学校の活動形態は、学生が授業案を作成し、それに沿って授業を進める「授業実践型」をとっており、サポーターの学生にとっては、個々の生徒の質問に答える「個別学習支援型」となっていた。こうした活動形態において、授業者の学生は(1) 教材づくりを通して、教材の作り方・授業の組み立て方・マネジメントの仕方を実践的に学ぶことができた。また、それは将来教職を希望している学生にとっては、教育実習前の貴重な機会となっていた。また、活動の内容について学生がある程度関与できることから、学生自身が主体的に動く力を身につけることができたという点が学習効果としてあらわれている。

このように、各学校における学習効果を見ると、姫野(2006)の指摘するような活動形態による学習効果の違いがみられたが、その違いを明確にするためには継続的に調査していく必要となるだろう。

最後に、活動をおこなった学生全体にみられた学習効果は、(1) 教職希望であるかどうかに関わらず、教員、生徒、関係者の方々との交流によって、対人関係スキルが身につくこと、(2) 大学以外の地域の方(教員、生徒、教育委員会など)と交流することで視野が広がることであった。

このように、学生にとって「学習ボランティア活動」は意義のある活動であり、さらにより活動にするために、学生へのサポート体制のあり方、環境づくりを検討していく必要がある。入江(2014)があげるような学生が「自分たちで学びあう」コミュニティの形成を目指すのであれば、まずは、学生たちが自分たちでさらに学びあうことができる空間や場づくりを大学内に設けていくことが必要ではないかと考えている。

次節は、学生たちの最終報告書の内容である。

第5節 学生の活動に関する最終報告

放課後学習支援に参加して

井上 清菜

○参加している中学校と参加した日時

<A 中学校>

○参加した日時

- ①2016年9月2日(金) 14:35~15:25
- ②2016年9月9日(金) 14:35~17:00
- ③2016年9月16日(金) 14:35~17:00
- ④2016年9月23日(金) 16:10~17:00
- ⑤2016年9月30日(金) 13:35~14:25
- ⑥2016年10月14日(金) 16:00~17:00 計6回

○活動内容

中学校5校時の数学の時間や、放課後学習会に参加し、生徒が解いているプリントでわからないところを指導する。5校時の時間はクラスを2つに分けて行う。数学の得意不得意に関係なくクラス分けがされていて、指導が必要な生徒と自分で解ける生徒が混在する。大学生は机間巡視をし、生徒の手が止まった問題を指導する。たまに先生から、指導につく生徒を指定されるときもある。一方放課後学習会は上級コースと初級コースにわけられ、大学生は初級コースに参加する。生徒が自ら手を挙げ教える場合と、机間指導をする場合がある。プリントの内容は事前に配布され、予習をしていくため余裕をもって指導することができる。

○学んだこと、気が付いたこと

放課後学習会は、数学のクラスを上級コースと初級コースの2クラスにわけ、私達は初級コースの指導に入ったが、数学に対する苦手意識が高い生徒が多い。私が参加した授業では平方根の学習が中心だったが、問題の1問目からつまづく生徒も少なくなかった。紙に書きながら丁寧に指導すると解ける生徒も多いが、前の問題を参考に解いている様子なので、その計算の方法自体を理解しているとはいいがたい。その時間にはできていても、次の時間には解き方を忘れていくということも多い。そのような生徒には何度も何度も繰り返し教える必要があるだろう。思いのほか教えてほしいと望む生徒が多く、全員に手が回らなかった。数学が苦手な1人の生徒につきつきりということもあり、人数がもう少し必要だと感じた。

また、積極的に大学生に聞いてくれる生徒もいるが、自分から聞けない生徒もいる。隣の生徒同士で教え合う姿も見られる。その場合、教えている生徒の活動が中断されてしまうため、指導に入るようにすると、解けなかった生徒も私たちの話を聞き自分の力で解けるようになった。

学習ボランティアが始まる前は、どのくらいの生徒が指導を必要としているのかわからず、暇になることもあるのではないかと考えていたが、指導を必要とする生徒や、積極的に手を挙げて聞いてくれる生徒が多いため、50分間がとても短く感じる。生徒は年齢が近いためか、たくさん質問してくれるので、教師になりたい私にとっては、現場での良い勉強になった。

○自分なりに工夫したこと

言葉で教えても理解できない様子が見られたため、自分のプリントに書きながら視覚的に指導するよう心掛けた。また、問題の例がプリントに載っているようだったので、解き方例に沿って問題を解いてみるよう指示した。また、全く違う解き方をする問題が4つほどのっているプリントでは、一度教えた問題と同じ問題から解かせることで、その解きかたの定着を目指した。前に解けなかった問題を何度もやるうちに解けるようになった生徒には、意識して褒めるようにした。できるだけまんべんなくいろいろな生徒に指導できるよう心掛けたが、1人につきつきりとなるときもあった。

○参加してみて難しかったこと

平方根は自分では理解しているが、教えるのは難しかった。ルートの中の数字が同じものをかけるとルートが無くなるということも、そのようになることはわかっているが生徒は「なぜ？」と思っている様子だったため、説明が難しかった。また、教えてほしい生徒が多く、すべての生徒に指導しきれず、手が止まる生徒もいた。もう少し人数が増えるとよいのではないかと思う。

一度生徒は授業で習っている内容であるため、完全に解き方がわからない生徒はあまり見られなかった。少しでも、思い出しながら生徒の力で解いてほしいが、どこまで教えていいのかわからなかった。自分でももう少し考えて、生徒が思い出しながら自分で解ける工夫をしていきたいと思った。

○今後の活動にどのように活かしていきたいか

教えるのが難しいと感じる問題は、前日にしっかり予習をすることが大切であると思う。「もしかしたらここを聞かれるかな？」などと生徒に聞かれそうな部分を事前に考えておくことも大事だと思った。生徒も授業で一度学習しているところであるため、少しヒントを出すと解ける場合がほとんどである。あまりヒントを出しすぎず、生徒が自分の力で解けるような工夫をしていきたい。大学生の指導を必要としている生徒が多いので、ひとりの生徒につきつきりになることなく、様々な生徒に教え、自分で問題を解けるような手助けをしていきたい。生徒は少しでも褒められるとうれしいと思うので、今まで通りできるようになったことをほめるよう心がけたい。

○お世話になった方への謝辞

酒田市立第A中学校の先生方、生徒さん、ありがとうございました。

○後輩の学生へのアドバイス

大学生に教えてもらいたいと思っている生徒は意外と多いようです。効率よく教えるためにも、事前に配られるプリントをしっかりと予習することが大切です。自分が思っているよりも、伝えることは難しいと思います。なかなか理解してもらえないこともあります。ですが、紙に書いたり、自分なりにわかりやすい教え方を見つけたりして、工夫することが大切です。一生懸命教えることで、生徒たちも理解してくれますし、次に会った時も、元気に質問してくれます。ぜひ、自分なりの工夫で、教えることの楽しさを見つけてください。

○参加している中学校と参加した日時

<B 中学校>

9月2, 16, 23日(金)	16時30分~18時	
10月14, 28日(金)	16時30分~18時	
11月4, 25日(金)	16時30分~18時	
12月9, 16日(金)	16時30分~18時	
1月13日(金)	16時30分~17時30分	計10回

○活動内容

酒田B中では、国語、数学、英語の三教科を中心に、基本をしっかり押さえるレベルの問題を学生が作成、解説する授業を行っている。それぞれの科目を担当する学生が一人おり、他の学生はホワイトボードに解答を板書する、生徒からの個別の質問に応じるなど、サポート役でもある。プリントの作成が学生により行われているので、作成する学生は生徒からの要望に応じて問題を作成できる。

○学んだこと・気がついたこと

アメリカ留学で得た素晴らしい体験を中学生に伝えたい。教職に関心がある学生として、学習支援を通じてのリアルな経験がしたい。そんな思いを胸に参加を決めた今年の学習ボランティアであるが、時間が経つのは早いもので、次回で最後の学習ボランティアとなる。

私は酒田第B中学校にて、主に英語を担当教科に学習ボランティアをしている。初日にこそ私用で参加できなかったものの、以降全ての活動日に参加している。何度か授業に参加し、指導のコツや授業プランの作成を勉強したものの、まだまだ学ぶべきことは多く、元気いっぱい、人懐っこい酒田B中の生徒たちから学ぶこともたくさんある。生徒のニーズに応えるために、毎回の授業へしっかりと準備をして臨んでいるが、私の担当科目である英語の授業の日は特に気合が入る。生徒たちは臆することなく、私が問題の解説をしている間や個人個人を見て回っている時間にも、積極的に質問をしてくれる。生徒たちは本来勉強が嫌いなわけではなく、勉強の仕方やどこから手を付けていけばよいかわからないだけなのかもしれない。ならば私たち学習ボランティアのメンバーがそれを教えてあげることができれば、理想的ではないかと思う。生徒の勉強意欲を引き出し、自分にもこんなに問題が解けるとわかってもらい、その自信が更なる学習へと繋がっていくのではと思った。教師という立場は私たちのような学習ボランティアであっても責任重大で、常に生徒のことを第一に考え、教える必要があると思った。

○自分なりに工夫したこと

これまでに四回の英語の授業があり、私が英語を教えるうえで、目標としたことを意識しながら授業を行うようにしている。それは大きく分けて二つある。一つ目は文法指導に重点を置かないこと、二つ目はスピーキングの機会を増やすことだ。

一つ目に関しては、私の留学での体験も関係している。私が学習支援をしている酒田B中の生徒たちも、中学生になって初めて英語という新しい教科に出会い、自分なりに日本語との違いに苦労しながらも、これまで勉強してきたことと思う。その勉強の過程で、生徒がどのようにして英語に苦手意識を持ち、英語嫌いになっていくかは個人差があると思うが、私は文法中心的な指導が一つの原因ではないかと思う。日本の英語教育は、戦前から文法訳読式と言われ、英語を日本語に訳し、わからない語彙を調べ、文法を確認し、複雑で難しい内容の英文を読解することが中心のスタイルである。だが、この学習方法では英語の学習自体が単なる訳読作業になり、英語を使う楽しさというものが伝わっていないように思う。私もそのような英語教育を受けてきた学生の一人だからこそ、アメリカで英語を勉強した時は本当に目から鱗の連続だった。初めて英語を勉強していると思わず、かつ英語を学ぶことを楽しんでいると思えた。文法を気にしすぎて相手に自分の意思を伝えることができなければ、それこそ本末転倒だという考えがアメリカ英語である。私は文法が全く必要ではないとは言わない。ある程度の文法は必要で、英語を教えるうえでは必ず触れなければならない。だが、それに偏りすぎても面白くない。バランスが重要であり、私はそのことを意識した授業づくりを目指している。

二つ目のスピーキングの機会を増やすことに関しては、一つ目の文法中心の日本の英語教育に関係するところが多い。英語とは言語である。当たり前なことだが、言語は言葉であり、言葉は話すという機会を得て習得され、自分のものとなっていく。すでに述べたように、英訳や語彙の確認だけでは英語の楽しさは伝わらない。自分の話した英語が相手に伝わり、意思の疎通が取れた時に初めて英語を学ぶ楽しさが実感できる。私は生徒たちにそのような体験をしてほしいと思い、プリントの問題を解いて終わりにするのではなく、答えを確認した後に正しい英文を声に出して読んでもらっている。音読することで英語独特のリズムに慣れ、スピーキングの練習にもなり、かつ自分の話した英語を自分の耳で聞くことにより、英語を聞く力も身につく。スピーキングの練習を増やすことで、生徒たちが気づかなかった英語の楽しさを発見し、机に向かうだけが英語の勉強ではないと思ってくれば、その後の英語学習にも大きな動機付けとなるだろう。実現は簡単ではないが、少しでも近づけるように指導していきたい。

○参加してみて難しかったこと

ここまでの活動を通して一番難しいと感じたのは、授業プリントの作成だと思う。プリントの見易さ、内容の充実はもちろんのこと、生徒がこれまで勉強してきた教科書やワークも参考に問題を作りつつ、加えて入試レベルの問題も少しではあるが解いてもらうようにして作成している。授業はほかのメンバーとも協力して、生徒一人一人のわからないところを理解してもらえるように努めているが、やはり授業プリントは全く情報がない段階から作るのも、非常に難しい。第一回目の英語授業の場合、簡単に文法を説明する説明文を作り、口頭で文法を説明し、その文法の確認としての並べ替え問題を解き、答え合わせをし、最後に正しい英文を音読し終了という形にした。生徒たちは文法の説明を熱心に聞いてくれたので、その後の並び替えもスムーズにいったように思う。限られた時間の中で英語の四技能をバランス良く勉強してもらうため、この形が理想ではないかと思った。しかし、生徒の方からは私の留学の話や、アメリカで鍛えた英語をもっと聞きたいという意見が聞かれた。私自身このような反応を貰えるとは思っていなかったもので、とても嬉しかった。こうして学習ボランティアに参加することになり、酒田B中の生徒たちと会

えたのも縁である。それならば、私にしかできないような授業をしたいと思った。頂いた意見はもっとスピーキングの時間を増やし、英語を勉強するというよりは、英語を楽しんでもらう方針にすることで応えたい。入試に向けた堅苦しい授業よりは、そちらの方が生徒たちには合っているのかもしれない。

○今後の活動にどうやって生かしていきたいか

これまでの活動を通して、回を重ねるごとに授業プリントの内容もより充実し、教科担当者の授業の進め方も上手になった。できることなら、毎回の授業の前に勉強会を開き、生徒に教える問題をメンバー全員が理解している状態で、学ボラに望めればベストである。しかし、学生一人一人の予定もあるので、どう調節し時間を作るかが今後の課題かと思う。

○お世話になった方への謝辞

酒田第B中学校英語科の島田先生、学習ボランティア担当の國眼先生、白旗先生、とても頼りになるB中学習ボランティアメンバーの皆さん、そして何より毎回の学習ボランティアに参加してくれた酒田第B中学校の生徒の皆さんに感謝申し上げます。ありがとうございました。

○後輩の学生へのアドバイス

- ・英語科の場合、四技能をバランスよく勉強できるようなプリント作り。
- ・プリントは今回の学習ボランティアで使用したものを引き継いでもよいと思う。
- ・生徒のニーズに応じて授業をする。

○参加している中学校と参加した日時

<A 中学校>

○参加した日時

- ①2016年9月2日(金) 14:35~15:25
- ②2016年9月9日(金) 14:35~17:00
- ③2016年9月16日(金) 14:35~17:00
- ④2016年9月23日(金) 16:10~17:00
- ⑤2016年9月30日(金) 13:35~14:25
- ⑥2016年10月14日(金) 16:00~17:00 計6回

○活動内容

あらかじめ中学校から配布されたプリント(主に数学)に基づき、中学校の総合学習の時間または放課後の時間を使って個別に指導した。時間は総合学習の時間と放課後を使った2時間程度から、放課後のみの1時間という場合もあった。対象学年は中学校1年生から3年生まで幅広い範囲であった。また3年生は、受験を控えているということもあり、実際の入試問題に近い問題も指導した。数学の場合はどれも基本計算がほとんどで、これは生徒の躓きを無くするためのものと考えられる。

○学んだこと、気が付いたこと

一つ目は個別学習の重要性である。普段は集団で授業を受けている生徒は、それぞれの習熟度に大きな差がある。それをそのままにしておけば学力の面で格差が生まれ、それは開く一方である。また今回取り組んだ数学という教科の場合は積み重ねの学習が必要であり、基礎を理解していないとそこからステップアップしていくことは難しい。その為今回行った学習ボランティアのような活動を通じて、わからないところを中心に個別指導していくことは学力の格差を生まないためにも重要であると考えた。

二つ目は生徒への指導の方法である。数学のような答えが明確な教科は指導を行っていく中で、ついつい答えを教えたくなくなってしまう。しかしながら、それでは生徒の学力の向上には繋がらず意味のないものとなってしまう。その為、答えまでたどり着くためのプロセスを考えさせ、身につけさせることが非常に大切である。自己満足の指導ではなく、生徒のことを考えた指導を行うということが学習支援において非常に重要であると思った。

○自分なりに工夫したこと

自分なりに工夫したこととしては、生徒に答えを教えないことである。これも主に数学での話であるが、答えまでたどり着くためのプロセスというものがとても大事だと考え、プロセスを辿っていくためのヒントを生徒に教えた。それにより生徒は問題の解き方を覚え、解き方そのものを学ぶという仕組みができる。このようにすれば、次回同じような問題を解く際も、すんなり

解くことができ、入試や定期テストなどの本番の場面でも力を発揮することができるだろう。

○参加してみて難しかったこと

難しかったことは、まずは生徒とのコミュニケーションである。思春期真っ盛りの中学生なので、自分からわからないところを質問してくることは非常に少ない。そこで鉛筆が止まっている生徒を見つけると、自分から声をかけるということが多く大変であった。また生徒との会話でもジェネレーションギャップを感じて、なかなか話題についていけないということが少なくなかった。難しいと感じたのは主に生徒との接し方であった。

○今後の活動にどのように活かしていきたいか

今回の活動で出た反省はスタッフそれぞれにあらうが、些細なことであってもそれを学習支援に関わった学生が全員で共有するということが大切であると思う。今後は、生徒のためを思った指導の大切さを他の学生スタッフと共有し、それを実践していきたいと考える。そうすれば今まで以上に生徒の学力向上へとつながるのではないだろうか。

○お世話になった方への謝辞

酒田市立第A中学校の先生方や生徒のみなさん、ありがとうございました。

○後輩の学生へのアドバイス

生徒に指導する上で壁にぶつかったときは、気軽に仲間に相談したほうがよいと思います。また、自分が中学生や高校生だった頃のことをもう一度思い出し、自分が生徒だったらということを考え、それを基に指導していけば必ずうまくいくと思います。失敗をくりかえしながら、多くのことを学んでください。

○参加している中学校と参加した日時

〈B 中学校〉

・参加日時

①8月26日（金）16：30～17：45

②9月2日（金） 16：30～17：45

③9月9日（金） 16：30～17：45

④9月16日（金）16：30～17：45

以下最終日の1月27日（金）まで毎週金曜日に参加。 計15回

○活動内容

酒田第B中学校では毎週金曜日に1時間～1時間半の放課後学習活動を行っている。主に3年生の希望者を対象としている。私たち学生で毎回の授業で用いる資料を作成して授業を実施している。授業者1名とサポーター5名の計6名で実施しており、学習会終了後に生徒の通学バスの時間まで適宜質疑応答に応じ、授業中で理解しきれなかった部分について定着を図る。また、授業終了後は担当教員には毎回反省会を行っていただき、次回の授業に活かすことができた。

実施した教科は、国語・数学・英語の3教科であり、私はその中でも国語の授業を担当した。内容としては現代文（文の組み立て、品詞、課題作文のコツ）を3回、古文（仁和寺にある法師）を1回、漢文（入試過去問より選別）を1回実施した。

○学んだこと、気が付いたこと

自分で理解していると思っていっても、生徒が理解できないと意味がないため、生徒側の立場で分かりやすい資料を作成する必要がある。また、毎回の反省会で、それについて話し合い、次回の授業に活かすことが出来た。そして、授業内容を理解した上で、授業に参加しているつもりでも、生徒側から思い掛けない質問が出ることもあるので、事前準備や教材研究がいかに大切かを学んだ。

酒田第B中学校では生徒の学力強化はもちろんだが、それ以上に生徒のが学習意欲の向上を一番の目的として授業を行っている。そのため、授業者の授業とサポーターによる机間指導の他に、生徒同士の教え合いにも着目し、答えを教えるのではなく、一緒になって答えを導いていくためのヒントを与えるような授業形式にした。

○自分なりに工夫したこと

上でも述べたように生徒に理解させるために、難しい言葉や専門用語を使わないようにし、生徒に苦手意識を持たせないように工夫した。逆に自分の苦手を無くすためにはどうすればよいかについて先に述べた授業後の反省会でサポーターや担当教員にアドバイスをもらい、次回の資料作成に活かした。

また、一方的な講義形式になってしまうと、生徒の集中力が低下してしまう恐れがあるため、

生徒側と授業者、サポーターのコミュニケーションの充実も意識して授業を行った。授業教材に関しては、生徒の習熟度に合わせた教材を目指し、毎回の授業で生徒のニーズや苦手を聞き、それに合わせた教材を用意するようにした。

そして、プリントは毎回2枚程度にまとめ、1枚目は要点、2枚目は問題とした。問題を解きながら、1枚目の要点を確認し知識の定着を図った。要点プリントではできる限り例題もともに記載し、それを解説しながら授業を進めた。

○参加してみて難しかったこと

私が学ボラに参加して最も難しいと感じたのは教材の作成である。内容については上の「自分なりに工夫したこと」に記載しているため省略する。

また、やはり難しかったことといえば生徒とのコミュニケーションである。やはり学生と生徒の間に壁を作らないように出来るだけコミュニケーションを取り、生徒が質問しやすい環境を作り出すことが難しいと感じた。

○今後の活動にどのように活かしていきたいか

私は教員を目指しており、教員採用試験も受験しようと考えている。そのため、今回の学ボラで生徒とコミュニケーションを取り、授業に活かしていくスキルや、実際に授業を行うことで授業の進め方や時間の割り振り方も学ぶことができた。これは、将来教員になった時だけでなく、一般企業へ就職したときにも必ず必要となるスキルであると思うので今回の体験は私にとって非常に意義のあるものとなった。

○お世話になった方への謝辞

担当の島田先生をはじめとして、酒田第B中学校の先生方や生徒のみなさん、ありがとうございました。ことに島田先生にはお忙しいスケジュールの中で貴重な時間をたびたび割いて頂き、教材研究や指導方法に関して適切な助言を頂戴したことに深く感謝します。

○後輩へのアドバイス

事前の教材研究や授業内で質問されるかもしれない質問項目を事前に考えておくと、いざそうなったときに困ることがない。また、連絡はこまめに取り合い、疑問に思ったことは早めに解決しておくことが必要だと感じた。

○参加した中学校と参加した日時

＜A 中学校＞

・参加した日時

- ①9月2日（金）14：00 ～ 17：00
- ②9月9日（金）14：00 ～ 17：00
- ③9月16日（金）14：00 ～ 17：00
- ④9月23日（金）16：00 ～ 17：00
- ⑤9月30日（金）13：30 ～ 14：30
- ⑥11月4日（金）16：00 ～ 17：00
- ⑦11月18日（金）14：30 ～ 15：30
- ⑧11月25日（金）16：00 ～ 17：00
- ⑨12月2日（金）14：30 ～ 17：00
- ⑩12月9日（金）16：00 ～ 17：00

計 10 回

○活動内容

酒田市立第A中学校では、主に事前に配布されたプリント（数学）を用いて学習支援にあたった。一斉授業でなく、個人個人のペースに合わせて問題を解いていき、分からないところがあれば、生徒が手を挙げ、大学生が教えるという形式をとっている。個別で問題を解くために自分の分からないところを見つけることが出来、そこを大学生と解くことによって解き方を学ぶことが出来る。

○学んだこと、気づいたこと

学ボラに参加して、教鞭をとられている先生方から様々なことを学ぶことが出来た。プリント学習といえば、大学生は答えやちょっとした解き方を教えるものだと思っていたが、そうではなかった。きちんと教材を研究・予習していかななくてはならない。さもないと生徒に教えることができないのである。そして、ただ答えを教えるのではなく、「解き方」を教えることの重要性に気づいた。これは先生の指導の中からも感じる事が出来た。塾で講師をしている私にとって、「やり方・解き方」を定着させることが容易でないことは、身をもって痛感している。定着させるために先生がやっていたことは実際の日常にあるものから、考えやすいように提示していた。私もこの方法は何度か試したことはあるが、すべての生徒に同じ具体例を提示してしまった。しかし、先生は、生徒一人ひとりに対して、違う具体例を提示していた。そのため、考えやすくなり、ペンを走らせる生徒は数多くいた。また、話し方も学習することに前向きに取り組めるように生徒をのせていけるような話し方というものも学ぶことが出来た。

○自分なりに工夫したこと

A中の活動では、プリントを用いて学習するため、生徒への指導の仕方を生徒一人ひとりに合わせ変えていく必要がある。例えば、数学の場合だったら、言葉を言っただけで理解することの

出来る生徒には、それ以上は教えないようにし、言葉で説明しても納得しない生徒に対しては、解き方・やり方を紙に書きながら教えるようにしている。他に工夫したことは、生徒とのコミュニケーションの取り方である。私たち大学生は、授業時間に学習支援を行っているため、生徒と話す時間は決して多くない。しかし、その中でも、なるべくたくさんの方と話すように心がけた。

○参加して難しかったこと

学ボラに参加して、難しかったことは指導の仕方である。生徒は一人ひとり性格が違う。そんな生徒たちに誰に対しても同じ指導法を用いると、理解されているのかどうか不安になることがあった。またコミュニケーションの取り方などは日頃から接してないと出来ないことがあることがわかった。

○今後の活動をどのようにしていきたいか

私はこの学ボラに参加して考えたことは様々あるが、今後もこの活動を発展させていきたいと思っている。今年は、教職課程を履修している学生が大勢いるため、ある程度、「教育」「指導法」に関する知識を持っていると思う。したがって、そういう学生にはより自分のスキルを上げるよう活動して欲しいと思っている。一方教職課程を履修していない学生でも、「子どもが好き」などの理由で参加してもよいと思う。今、この「学習ボランティア」の活動は学内では一部の人にしか知られていない。今後は、この活動を大学中に広めて行きたいと考えている。そして、私はここで学んだことを糧にして、将来「教員」という職に就きたいと考えている。学ボラの活動はここで終わりではない。継続的に続けて行くことが重要だろう。

○お世話になった方への謝辞

担当の松本先生はじめ、第A中学校の先生方、生徒のみなさん、ありがとうございました。学ボラで生徒と関わらせていただけたおかげで多くのことを学ぶことが出来ました。それと同時に、普段では感じる事の出来ない、多くのことを吸収することが出来ました。これもみなさまのご協力のおかげです。ありがとうございました。

○後輩へのアドバイス

事前に放課後学習支援で使用するプリントをしっかりと予習することが大切です。もしわからないものがあれば、先輩に聞くこともお勧めします。中学生と話をすることが多くなるので、中学生の興味関心があることを調べておくと、話しやすくなると思います。「学ボラ」に参加してよい経験を積んでください。

学習ボランティア報告書

須藤 洋祐

○活動している中学校…A 中 参加回数：8回

○活動内容

授業の5時間目の総合学習の時間と放課後学習での学習支援（主に数学）

A 中では5時間目の時間にプリントが生徒に配られ、生徒が分からないところを学生が教えるシステムです。放課後学習も同じようにプリント学習を中心に、生徒が分からないところを学生が教えていきます。事前にプリントをいただいているのですが、当日に別の教科の指導を依頼されることもありました。

明るい生徒が多い印象で、非常に話しやすい雰囲気です。積極的に質問が来るので学生もやりがいがあると感じています。時おり友達同士で固まり学習とは関係のない話をしている生徒も見られますが、学習支援では学習への意欲を引き出すことも求められると思います。

○自分なりに工夫したこと

勉強を教える以前に、生徒と仲良くなることを心がけています。仲良くなることで質問しやすくなるようにすることが狙いです。好きなことを話すときの生徒の目は輝いて見えます。楽しそうに話す姿を見ると私自身も楽しくなります。学習ボランティアなので勉強を教えることが前提ですが、大学生と中学生の大事なコミュニケーションの場となっていると感じます。

○参加してみて難しかったこと

私にとって一番つらいのが、生徒に教えて反応が鈍い時です。そこで、生徒との信頼関係の構築のために中学生の学校生活や、大学生の日常について話をしたりして、生徒が学生に話しかけやすくなるよう試みました。それにより、生徒は気軽に質問ができるようになり、学習の質が上がったと感じます。

○今後の課題、および今後活かしたいこと

生徒の特長をつかんでよりコミュニケーションをとっていきたいと思います。目標としてはプライベートで生徒とすれ違ったときにあいさつしてもらえくらい覚えてもらえるように努めるつもりです。来年度も活動を継続することが出来たら、今回の良かった点や反省点を活かして良い学習ボランティアにしたいと願っています。

なお、今年度の活動では、体制が整うまでやや連絡面で不都合が生じました。次年度以降、学生間、对学校への連携を緊密に図る工夫をすることが大切だと考えます。

(1) 活動した中学校…B 中学校

活動参加回数 6 回

(2) 活動内容

B 中学校では授業形式で実施しました。メインとなって授業を進める学生と、それをサポートする学生に分かれて進めました。私は数学を担当したので、数学では基本計算を中心に教材を作成するとともに授業計画をたてました。

(3) 学んだこと・気がついたこと

私がこの学習ボランティア活動で学んだことや気がついたことがたくさんありました。

一つ目は「伝える」ことについてです。自分が伝えたいつもりでも、生徒やサポートしてくれる学生に伝わっていないことがあり、伝えることの難しさを実感しました。例えば、生徒に指示を出す場面では、何をどのように、どこから行えばよいのかが伝わらないことがあり、指示を出した直後に、生徒から「何をやるの?」といった質問が出てしまったことがあります。

二つ目は私自身が毎回のボランティアをととても楽しみにしていたことです。生徒が問題を解けたときの表情や、生徒が自分の好きなことを話すときの笑顔は忘れられません。ボランティアに行く度にいきいきとした生徒の姿を見ることができると思うと、学習ボランティアに行くのがとても楽しみでした。

(4) 自分なりに工夫したこと

生徒に教えるときに答えを教えるのではなく、ヒントを与え、生徒自らの力で問題を解くことができるように心がけました。生徒から答えを引き出すような形にすることで生徒の理解度が向上を図りました。

私は数学の教材を作成しましたが、作成する上で一番気をつけたことは、どのレベルの子どもに合わせてプリントを作るかということです。B 中学校では私が作成したプリントをすぐに解く生徒と、解くのに時間のかかる生徒がいました。そのため解くのに時間がかかる生徒を基準にプリントを作成しました。すぐに解ける生徒に対しては、応用問題という形で別途難しい問題を作成することで、全員が数学のプリントと向き合えるように工夫しました。

(5) 参加してみて難しかったこと

生徒の答えを引き出すための問いかけを考えることがとても難しかったです。先に述べたように、ただ答えを教えても生徒の力にはなりません。生徒自ら答えを引き出すことができるようヒントを出すのですが、ヒントが伝わらないことや答えに近いヒントを出してしまうことがありました。事前に予習することで、ヒントの出し方などを勉強できるため、事前学習の大切さを感じました。

(6) 今後活かしたいこと

私は教員を志望しています。そのため今回の経験は非常に大きなものとなりました。これから4年生になると教育実習があります。また教員採用試験では授業実践が求められます。今回の経験を活かしより充実した実習や実践を行えるよう努めたいと思います。

また人の前に立って話す機会は自分の自信につながります。今回授業を行わせていただき人の前に立って話す自信ができました。

(7) 後輩へのメッセージ

来年度は二年生を中心にして、この学習ボランティアをより良い活動にしてほしいと願っています。私たちもできる限りアドバイスや手助けするつもりです。また、就職活動終了後は学習ボランティアに参加したいと思います。失敗も経験すると思いますが、大きく成長できる活動だと思いますので頑張ってください。

学習ボランティア報告書

横山 広太郎

○参加校および参加日時

B 中学校

8月26日(金) 9月2日(金) 9月17日(金) 9月24日(金) 10月14日(金)
10月28日(金) 11月14日(金) 11月18日(金) 11月25日(金)
12月2日(金) 12月9日(金) 1月13日(金) 1月27日(金) 計13回

○活動内容

講義を担当する学生のサポートと生徒からの質問に対する助言や指導

○学んだこと、気づいたこと

放課後学習会に参加している生徒は、教科や内容により習熟度に差があり各個人に合わせた解説を行わなければならなかった。同時に同じ内容を説明しても、一度で理解する生徒もいれば、十分に理解が進まない生徒もいる。また私の説明だけでは十分ではなく、近くの席に座っている生徒に説明してもらって理解する生徒もいる。わからない部分があったとき、すぐに手を挙げる生徒もいれば、手を挙げることをためらう生徒もいた。1人1人の習熟度や、疑問点をしっかりと把握しなければ、押しつけがましい解説になってしまう。学習ボランティアの活動開始当初は各生徒の習熟度、またどのように学生側へ接してくるのかを把握するのが大きな課題容になった。

しかし、徐々に学生も生徒も学習会に慣れてくると学生は授業の内容以外にも気を配れるようになり、生徒側も気軽に学生に話しかけられる空気が生まれた。また、活動の際に使用する教材は学生が作成するので、教える側にもある程度教材に対する理解が求められる。ボランティア開始の前に教材を完成させ、他のメンバーと共有してボランティア活動の円滑化を図るようにもした。学生にも不得意、得意な教科があるので各自で得意な教科の教材作りを担当することが大事であった。

○自分なりに工夫したところ

生徒は席に座って教材に向かい、学生は歩き回って教材についての説明を行うので必然的に学生が生徒を見下ろすような恰好になる。上からの目線で生徒の視界を覆い隠すように指導を行うと圧迫感が生まれてしまう。その点に注意し教材の指導、説明を行う際は必ず生徒と同じ高さの目線になり指導、解説を行うようにした。また、一定時間教材に向かっていると集中力を保てなくなる生徒もいる。そういった生徒が所持している筆記用具や学校で使用している教科書についてこちら側から質問したり、互いの日常について会話をし、リラックスしてもらうように心がけた。

○参加してみて難しかったこと

学習ボランティアの活動を始めた当初は生徒との歳の差もあり、会話の話題を発見するのが非

常に困難であった。また自分自身は理解していてもその解法は生徒に教えるにはあまりにもトリッキーな方法だったので教えることはできず、おまけに私自身はそれ以外の理解の仕方を知らないため教えることに非常に時間がかかったケースがあった。

○今後の活動にどのように活かしていきたいか

学生側で生徒に対し無意識に壁を作ってしまう場合もあり、その部分はこれからも改善していかなければならないと感じている。教材に対する学生と生徒の理解は異なる。生徒に近い目線で教材を理解するように心がけたいと思う。

○謝辞

担当の島田先生をはじめ、第B中学校の先生方、生徒さん、活動の機会を与えて頂いたことや活動内容について適切な助言を頂いたことを感謝いたします。ありがとうございました。

わたしは子どもが好きで教育に興味があり、教職課程を受講しています。今回の学習ボランティアは、実際に中学校に出向いて生徒たちと触れ合えるということに魅力を感じ、参加を決めました。

わたしは、8月19日(金)、9月2日(金)、9月23日(金)の3日間、A中学校で学習支援に参加しました。教科はすべて数学でした。内容としては、中学3年生の数学の学習支援で、学年の数学科の先生とボランティアの学生2~3名で、1クラスに約4名のサポートが入りました。

3回参加した中で気づいたことがいくつかありました。まず、雰囲気の違いです。最初に参加したときは学力でクラスが分けられていたのですが、2回目と3回目は特に分けられていませんでした。

最初に学力で分けられていたときは、わたしは基礎をしっかり固めるのが目標のクラスに配属されました。中学生たちは平方根のプリントに取り組んでいましたが、基礎が定着していない生徒が見受けられました。解き方がわからないために集中力が保てず、周りの同級生たちとおしゃべりしてしまう生徒もいました。しかし、わたし自身はせっかく学習支援として中学校を訪問させていただいているので、みんなに1問でも多くできるようになってほしい、力になりたいと思い、生徒たちが楽しく勉強に取り組めるように声をかけて促しました。わたしは先に答えをすべて言うてしまうのはあまり良くないと思っています。教える側は、生徒自身に気付いてもらえるような導き方をすべきだと考えているので、状況にあった適切な声のかけ方を模索しているところです。

例えば集中力があまり長くもたない生徒には、「何時何分までに○番まで解こうね。もし早く終わったら計算ミスがないかしっかり確かめて、完璧になったら自分のこと呼んでね、丸付けするよ。」と言います。時間と問題を決めて目標を明確にすることで生徒も「○問なら少ないからできる。ここまではチャレンジしてみよう。」という気持ちになり、積極的に取り組んでくれることが多いものです。細かく区切って気持ちのオンとオフの切り替えながら演習させたほうがはかどりました。

一方、集中力はありますが問題の解き方が分からなくて手が止まっている生徒には、わからない問題を実際に紙に書いて教えました。可視化することによって生徒自身もわかりやすくなると思いますし、ただ計算するだけでなくどうしてこのように処理するのかを流れで覚えてもらったほうがわかりやすいと思ったからです。特に多く見られたのは、有理化の仕方を忘れているケースや \sqrt{a} を $a\sqrt{b}$ の形に変形させるのを忘れて終わってしまっているケースでした。いずれもありがちなミスですが、そのような簡単どころでとらないと点数は増えていかないので気を付けて解いてほしいと思いました。

また、生徒たちの印象に残すために特に気を付けてほしいポイントを強調して教えました。先に述べたように、計算で点を落としてはいけないことや、声掛けの例としては、「 $\sqrt{\quad}$ の中が素数になるまで、素因数分解をしていこう。素因数分解って覚えている？」と、正答から必要な解法を逆算するように確認して行って、どこまでわかっているところから理解できていないのかを明確にしました。

また、数学に苦手意識を持っていそうな生徒には、難しい話し方ではなく言葉を極力噛み砕いて理解してもらえるように工夫しました。

一方、解き方は理解しているのに雑な計算をしてしまって、もったいない凡ミスで失点している生徒には、すべて解き終わってからもう一度しっかりミスがないか確認するように声掛けをしました。些細なミスが無くなるだけで大幅に得点上がるので、細かく確認して自分自身でミスに気付いて直せるようにしてほしいと思いました。

さらに、静かに黙々と問題に取り組んでおり、自分からコミュニケーションをとるのがむずかしい生徒には、こちらから「どこかわからない問題あった？もしわからないところあったら教えるから、どれか教えてね。」と、相手が自分に声をかけやすい状況にしました。相手の気持ちを考えながら行動できたので、これからも生徒それぞれの特徴や年齢などに考慮した対応を心がけるつもりです。

反省点としては、生徒たちに教えることに集中したのはよかったのですが、先生の対応の仕方をよく観察することができませんでした。生徒と実際に触れ合う中で学ぶことも大切ですが、実際に現役で教壇に立たれている教師の働きかけを参考にしたいと思い、注意深く先生の行動を見るという目標を自分の中で立てていたので、あまり達成はできなかったかと思います。

次にこの参加経験のこれからの活かし方についてです。わたしは普段、塾講師のアルバイトをしており、中学生と高校生の数学をメインに教えています。今回の学習ボランティアを通して中学校内の様子を見させていただき、塾と学校との雰囲気が異なる点に気がありました。また生徒同士の普段の会話などから中学生の日常に触れることができました。

わからない問題を教えることも、普段の生活での勉強以外の指導も、生徒目線の考えをよく理解したうえで対応することが必要なのだと分かりました。そのためには、生徒それぞれがどのような特徴を持つのかしっかり認知していなければなりません。中学校では学級担任のほかに教科ごとに先生が変わるので、教員の間でも情報を共有しておく必要があると思います。

わたしの最終目標としては、生徒個々に合わせた教え方ができるようになることです。せっかく学習ボランティアでつながりができた生徒たちなので、1問でも多くできる問題を増やせるお手伝いをしたいと思います。今現在お休みをいただいておりますが、これから受験期に入るので再び現場復帰をして、中学生の学力向上に向けて頑張っていきたいと思います。

学ボラに参加して

今井 奏

私は市立B中学校の11月11日 英語、18日 国語、25日 数学、12月9日 英語、16日 数学、1月13日 英語の計6回の学習ボランティアに参加しました。弱点強化の学習支援が主な活動でした。やはり1人1人の生徒によって習熟度や理解力が違うので、それに応じた言葉選びや教え方をしなければならない点や、自分の中学生時代に学んだことばや考え方とは異なる表現の仕方を求められたとき、それに対応することが大変でした。しかし、生徒さんが「もう一度教えて」「今のどういうこと？」という風に積極的な学びの姿勢だったので、ボランティア活動を積極的で有意義なものに出来たと思います。回を追うごとに、活動が楽しくなり、途中からの参加だったため、もっと早くに始めていたら良かったと思いました。来年度以降に参加を考えている方は、早めの参加をおすすめします。これまでの活動で良いと言われたところは伸ばし、反省点や課題は改善して、来年度以降の活動に繋げていけたらいいと思います。最後になりましたが、お忙しい中、お時間を割いてご指導くださった島田先生に御礼申し上げ、結びとします。

○参加校および参加日時：B 中学校：

- ① 8月26日 16時30分～17時30分
- ② 9月2日 15時30分～17時00分
- ③ 9月23日 16時30分～17時30分
- ④ 9月30日 15時00分～17時00分
- ⑤ 10月28日 16時30分～17時30分
- ⑥ 11月4日 16時30分～17時30分
- ⑦ 11月18日 16時30分～17時30分
- ⑧ 12月9日 16時30分～17時15分
- ⑨ 12月16日 16時30分～17時15分
- ⑩ 1月13日 16時30分～17時15分 計10回

○活動内容

B 中学校の学習ボランティアでは、3、4年生の先輩が授業を行い、その他のメンバーが中学生が分からない問題を理解し最後まで解くことができるようにサポートする活動をした。

○学んだこと、気づいたこと

一番学んだことは、相手に分かりやすく教えることだ。今回の学習ボランティアに参加するまでは中学生に勉強を教えるという機会がなく経験はしたことがなかった。8月26日に第1回目（国語）の学習ボランティアがあった。その時は、中学生に分かりやすく教えることができるのかよく分からないまま、質問してくれた中学生に問題をただ説明するという方法で教えてしまった。そのため、第1回目のボランティアでは、私が分からないところを説明したことについて一部の中学生は理解してくれたのだが、あまり理解ができていない中学生がいた。私が、イメージしていたよりも中学生に上手く教えることができずに、改めて教える難しさを感じた。その原因としては、質問してきた中学生がどこまで分かっているのかをあまり確認せずに教えてしまったことだ。同じ問題でも、時間がかからず、すぐに答えを出せる生徒もいれば、どうやって答えを出せばいいのか分からずに時間がかかってしまう生徒もいる。そういった個別性に気づかなければ教えているのではなくやり方を伝えているだけではないかと考えた。そのことから、先輩方の教え方と自分の教え方はどこが違うのか比較してみた。すると、先輩方は、一人一人の解くスピードに合わせた教え方をしたり、難しい言葉をなるべく使わず中学生でも分かりやすい言葉を選んで説明していたりして理解しやすいように工夫をしていた。そのようなことが自分の教え方との大きな違いだと感じた。そこで、気づいたことから教え方を自分なりに工夫するように意識した。

○自分なりに工夫したこと

教え方を一人一人に合わせて工夫するように意識した。国語と英語では、どのような時に使われる用語なのか説明したり、使い方の具体的な例をあげたりした。数学の計算問題では、すぐに解き方を教えるのではなく、最初に解くための公式と一緒に確認した。そして、どの順番で解くの

か教えてから、分からない計算問題を考えてもらうようにした。解くスピードが速い人には、もう一度答えを見直してもらった。それは、プラス、マイナスの符号が間違っていないか、文字式の文字が抜けてないかなどの確認をして小さなミスを減らすようにした。また、文章題では何を求めるのかを確認した上で式をつくり、最後まで解いてもらうように工夫した。また、答えの単位の書き忘れをしないように注意してもらった。以前よりも少し自分なりに工夫をして中学生に教えたときに、「解けた。」「分かった。」「できた。」など言ってくれた時はうれしさや、やりがいを感じることができた。そのことから、中学生がどうやったら分かりやすいのかを考えて一人一人に合った教え方をしなければしっかりと教えることができないのだと感じた。

○参加してみて難しかったこと

難しかったことは、中学生とのコミュニケーションを取ることである。この学習ボランティアに参加するうえで、とても不安だったことがある。それは、しっかりと中学生とコミュニケーションを取れるのかということだった。というのは、普段の生活では中学生と関わることが少なかったからだ。コミュニケーションに消極的になってしまい、誰かから話しかけられるのを待っていた。中学生とは年齢もそんなに離れているわけでもないのにどうやって話しかけ、接したらいいのか分からずに戸惑ってしまったのである。しかし、内心ではコミュニケーションをなるべく早く取れるようになりたいと思っていた。そこで、普段のように、話しかけられるのをただ、待っているのではなく、自分から積極的に笑顔で話しかけて中学生とコミュニケーションを取るよう意識した。はじめの頃は、私も中学生もとても緊張していた。そのために、話しかけても会話があまり長く続かなかった。しかし、ボランティアの回数を重ねていくうちに、少しずつではあるが、コミュニケーションを取れるようになった。今では、中学生の方から声をかけてくれて、どこの問題が分からないのか気軽に質問してくれるようになり、学校生活の中で楽しかったことや、受験勉強のこと、学校行事の練習のこと、今は何を頑張っているのかなどさまざまなことを話してくれるようになった。すると、はじめの頃に、感じていたコミュニケーションが取れるだろうかという緊張や不安な気持ちが自然となくなっていった。また、余裕を持って中学生と話せるようになってからは、周りの様子にも目を向けられるようになった。

○今後どのように活かしていきたいか

このボランティア活動に参加してコミュニケーションをとる難しさを学んだ。そのことを活かして今後、いろんな方と関わる時に相手のことを考えてコミュニケーションをとるようにしたい。また、相手に分かりやすく伝えることを意識してきたので今後も継続していきたい。

○お世話になった方への謝辞

担当の島田先生をはじめとしまして、B中学校の先生方、生徒の皆さん、ありがとうございました。

○後輩の学生のアドバイス

問題の解き方の予習も必要だと思うが、積極的にコミュニケーションを取り、自分なりに工夫し、分かりやすく教えることが大切である。

○参加している中学校と参加した日時

<B 中学校>

- ・ 8 月 26 日 (16:30～17:30)
- ・ 9 月 2 日 (16:30～17:30)
- ・ 9 月 6 日 (15:30～17:30)
- ・ 9 月 23 日 (16:30～17:30)
- ・ 10 月 14 日 (16:30～17:30)
- ・ 10 月 28 日 (16:30～17:30)
- ・ 11 月 4 日 (16:30～17:30)
- ・ 11 月 25 日 (16:30～17:30)
- ・ 12 月 9 日 (16:30～17:15) 計 9 回

○活動内容

私は授業を行う先輩方のサポーターとして、授業内容や問題に関して生徒に分からない点が発生した際それに答える役割を担った。

○学んだこと、気がついたこと

年下の中学生とのコミュニケーションの取り方を学んだ。私は高校の時、地域の学童保育施設で小学生と関わることや部活動である程度年の近い後輩とは上手く接することができていた。しかし私は酒田に来てまだ年が浅く、上手くなじむことができるか心配だった。しかし年が近いこともありすぐになじむことができた。このことから、サポートを行う上で年の近い人がいることが重要であると思った。地域は異なっても年が近ければ親近感がわき、生徒も安心すると考えられる。また年が近いことに関連し、どんなことを知りたいのかも学ぶことができた。生徒と話す中で問題に関する質問もあったが、どのような受験勉強をしたか(何時間くらい、どれくらい勉強したか)、どんな高校に入学したのかなど受験に関する質問も多かった。この経験からも、年が近い人の必要性が感じられた。生徒と近い年齢であれば記憶も新しいので経験をより正確に伝えることができる。これは生徒の受験に対する不安を和らげることにもつながると思うので大切なことであるとする。他にも、授業を行う上で先輩方が作ってきた問題にも工夫がされていることを学んだ。授業で説明する部分や問題を作る時も時間を見据えた量を考えていることを知った。生徒のことを考えた問題だからこそいつも完成度の高い問題が出来るのだと思った。

○自分なりに工夫したこと

なるべくわかりやすい言葉を用いるように心がけた。しかし中でもやはり納得してくれる生徒と理解できていない生徒とがおり、自分の語彙力のなさを痛感した。これから大学生活を送る上での課題でもあったと感じた。また、生徒が問題などで困っているサインを見逃さないように、常に周りに気を配るように心がけた。自分が生徒側に立った時にすぐ問題が解決されないという

のはあまりいいことではないと思ったので、すぐに対応できるようにした。また生徒だけに集中するだけでなく、学習会後の反省会で意見を言えるように先輩方の行う授業にも関心を寄せた。先輩方の授業はどれも完成度の高い授業であったため、自分でも集中できた。その完成度を維持するため、細かいところの課題を見つけられるように努力した。

○参加してみて難しかったこと

コミュニケーションの取り方が難しく感じた。生徒と年が近く会話が多かつたぶん自分が最近の話題に疎いということを学んだ。話している中で時折会話について行けなかつたりすることがあった。関わる上で様々なジャンルの知識が必要であると学んだ。しかし、先輩方を見ていると生徒と信頼感を積む方法はそういうことばかりでもなさそうであったので、これから色々なコミュニケーションの取り方を学んでいきたいと思う。また、生徒との距離感をつかむのも難しかった。全員平等に信頼関係を築くべきだと思うのだが、最初に仲良くなってしまうとついそちらに偏ってしまった。この点に関しても自分のコミュニケーション能力の不足を感じた。

○今後の活動にどのように生かしていきたいか

今までの学習ボランティアの活動を振り返ってみて、周りを見て行動することができていると感じた。これからもこのことは意識し、生徒や先輩方などいろんな所に気を配りながら行動したいと思う。しかし教える時の言葉の使い方やコミュニケーションの取り方に課題が存在することを知った。今後はその点に関して他の先輩方の行動を見て学ぶことや、実際に中学生と話してどのような話し方がいいのかを知ることによって能力や技術を身につけたいと思う。これらのことを改善し、今後の学習ボランティアの質をあげられるよう努力したい。また今回振り返ったことは日常の大学生活でも同様のことが言えると感じたので、ボランティア活動以外の様々な機会でのことも考慮して今後も参加していきたいと思う。

また、今回学習ボランティアに参加してみて最も感じたことは、思っていたより楽しかったということだ。参加する前は上手く教えられるか、生徒たちに馴染むことができるかなど様々な不安があった。しかし参加してみるとそんなに深く考える必要は無く、先輩方の授業をきくことで自分の勉強にもなった。自分を振り返る経験やコミュニケーション能力を上げる経験なども積むことができ、最初は勉強を教えるだけだと考えていたが得られたものは多いと思う。これからの進路に関係なく参加するべきであると思った。また、今回参加したことで授業を行う上で気をつけることや問題を作成する上で何に気を配ることが大切なのかなど、授業を準備する苦勞を知ることができた。

○お世話になった方への謝辞

担当の島田先生をはじめ、B中学校の生徒さんには大変お世話になりました。学習会終了後の反省会では、発言の機会を与えていただいたことで自分の意見を他のメンバーの方々とも共有することができました。また、そのことから自分の意見を持つことの大切さも学ぶことができました。学習会では生徒さんから問題の質問だけでなく大学生活やアルバイトの話など色々なことを聞いてきてくれたおかげで、楽しく参加することができました。本当にありがとうございました。

○後輩の学生へのアドバイス

私は今1年生なので授業はせず先輩方のサポートというような形での参加だった。しかし教職課程希望者でもなくても参加して損をすることはないと思う。むしろどんな人でも参加してもらいたいと感じた。自分では教えられないと決めつけずに何事にも挑戦するべきであり、何よりこのボランティアではそのことの大切さを学んだ。また、人と関わるという点で考えてもとても貴重な経験を積むことができた。中学生という年下の人たちだけでなく、自分より様々な体験をしている先輩方にも出会うことができた。このことは自分の大学生活の幅を広げることにもつながり、年上の人とのコミュニケーションの取り方も学ぶことができる。私は色々なことを知り、学ぶことができるこのボランティアに、多くの人に参加してもらいたいと体験してみて思った。

人に教えるということ

柴田 雪乃

○参加した中学校と参加した日時

<A 中学校>

・参加した日時

- ① 11月25日（金） 14時半～15時半
- ② 11月29日（金） 14時半～17時
- ③ 12月9日（金） 16時～17時 計3回

○活動内容

六時間目の授業補助と放課後学習支援での指導

○学んだこと、気づいたこと

生徒が解の公式を覚えやすいように「解の公式の歌」を作るという工夫をしていました。生徒に歌ってもらったところ、口ずさめるようにできていてこれは確かに覚えやすいなど感じました。私も中学生の頃にこの解の公式の歌を知っていたら、数学の二次方程式の問題で楽に解け、苦勞しなかったのだろうと思いました。実際に問題を解いている最中に口ずさんでいる生徒がいて面白かったです。生徒がより解きやすくするために先生方が様々な苦勞して工夫を凝らしているということを知ることができました。

○自分なりに工夫したこと

事前にもらった解答の通りの解き方ではない解き方もたくさんあるので自分の可能な限り様々な解き方を想定して用意しておくこと。また、もらった解答の解き方はもちろん、解き方を説明できるように十分に理解しておくこと。想定外の解き方が出た場合は自分も実際にその場でその解き方で解いてみる。難しかったり、時間がかかる解き方をして考え込んでいる生徒がいた場合は、簡単で単純な解き方を教えてあげるようにすることを私なりに工夫しました。

○参加してみて難しかったこと

明らかに考え込んでいる生徒に声をかけても「大丈夫です」と何度も言われたときなど、教えてあげたいのにともどかしい思いをしました。他人に助けしてもらわず自分で考えて答えを導き出したい生徒が少なからずいる一方、手っ取り早く教えてもらって理解したい生徒がいて、両者を見分けるのが難しかったです。

また、生徒とコミュニケーションをもっと楽しく取りたかったのですが学ボラの参加回数が少なかったせいかな難しかったようです。同学年の学ボラ参加者の一人はほとんど毎回参加していたためか、生徒にとっても人気があって見ていて羨ましく思いました。

○今後の活動にどのように活かしていきたいか

私は教職を取るわけではありませんが人に教えるために、伝えるために様々な工夫をすること

が大切だということを学びました。今後友達に勉強を教えるときや物事を伝えるときにうまくわかるように、伝わるように様々な工夫をしていきたいと思えます。

○お世話になった方への謝辞

担当の松本先生をはじめとしまして、第A中学校の先生方、生徒さん、ありがとうございました。私はあまり参加することはできませんでしたが参加したどの日も得るものが多く楽しかったです。またこのような機会があれば参加したいと思えます。

学習ボランティアに参加して

成澤 友基

参加している中学校と参加した日時

<酒田市立 A 中学校>

参加した日時

- ①9月2日(金) 14時～17時
 - ②9月9日(金) 14時半～17時
 - ③9月16日(金) 14時半～17時
 - ④9月23日(金) 16時～17時
 - ⑤9月30日(金) 13時半～14時半
 - ⑥10月14日(金) 16時～17時
 - ⑦10月28日(金) 16時～17時
 - ⑧11月4日(金) 16時～17時
 - ⑨11月18日(金) 14時半～15時半
 - ⑩12月2日(金) 14時半～17時
 - ⑪12月9日(金) 16時～17時
- 計 11 回

○活動内容

総合的な学習時間および放課後学習において行われた数学のプリント学習の際に、問題がわからない生徒に対して個別指導をおこなった。

○学んだこと、気が付いたこと

学習ボランティアに参加して、質問した生徒に対して教師はどこが理解できないか、どこまで理解できているかを瞬時に判断することの大切さに気づいた。どのように教えれば質問した生徒は理解できるかを個別に考える必要があるからである。生徒一人一人をよく観察をして、個別にどのように教えれば理解ができるかを考えて指導をすることが、つまづくところは人それぞれであるが、問題を解くという最終目標を達成する近道ではないかと思った。ひとり一人に合った方法で教えることは将来教員を目指す立場である私にとってはとても参考になるものであり、教員以外でも社会人となったときに人に教える場面においても使えると思った。

また、学習の時間が長くなると集中力が切れてくる生徒がいるが、集中力が切れかけている生徒を見かけたとき、少しリフレッシュをさせてから勉強を再開すると効果的な場面がみられた。例えば、「どこまでできているの」や「ここまでできているからあともう少しで終わるね」と声をかけることによって再び集中力を高めるというやり方である。常に集中が保つことは大学生になっても簡単にできることではない。継続して勉強をできるように促すための工夫が必要であると感じ、今後に生かしていきたいと思った。

○自分なりに工夫したこと

できるだけ生徒と同じ高さの目線にたち表情をみながら指導をするようにし、教えた内容が本

当に理解できているのかいないのかを表情で確認しながら指導をするように心がけた。同じ目線に高さの目線に立つことにより、生徒が比較的質問をしやすいのではないかと思ったからである。

教えることで大事なことは、今解けない問題を解くということではなく、同じような問題に出会ったときに、一人で問題を解くことができることだと私は考えている。したがって質問されたときには、最初から答えを導きだせる公式などをすぐに教えるのではなく、問題を解くためのきっかけを作る程度に抑え、今後一人で同じような問題を解く場面になっても自力で解けるような指導を心がけていた。

今まで自分が同じところを勉強していた時を思い出し、自分はどこでどのような考えを持っていてつまづいていたかを思い返すよう努めた。教えている生徒と比較しながら、自分と似たようなつまづき方をしていたら、自分はそれをどのように解決したかを思い出しながら指導を行っていた。

指導を行う際には生徒の性格を見極めて、親身になりながら教えることで理解が進む生徒もいれば、あまり深く指導するよりもわからないところをピンポイントで教えた方が理解できる生徒もいるため、表情や態度などを観察しながらどちらのタイプなのかを判断しながら指導を行うようにした。

○参加して難しかったこと

私自身ではとても丁寧にわかりやすく教えているつもりでも、その教え方が生徒にとってわかりづらいことが少なくなく、どのように教えることがその生徒にとって一番わかりやすい指導なのかを探りながら行うのがとても難しく感じた。

自ら積極的にコミュニケーションをとろうとする生徒もいれば、コミュニケーションを積極的に行わない生徒もいた。生徒から話してこない場合、私自身から積極的にコミュニケーションを取ろうとしたが、話しかけてほしくないのか、恥ずかしくてコミュニケーションを取ることが出来ないのかあまり良い反応が返ってこないことが多々あった。その場合の生徒に対してどのようにコミュニケーションのきっかけを作っていけばよいか、どのように接していれば反応が返って来るのかわからないことがありその部分は私自身とても難しく感じる場所であった。

○今後の活動にどのように活かしていきたいか

将来教員や教育に関係する仕事に就きたいと考えているため学習ボランティアの活動はとても勉強になる部分が多く感じられた。生徒がどのような学校生活を送っているのか、どのようにコミュニケーションを取るべきか、どのような教え方をすればよい反応が帰ってくるのかななどを体験できる良い機会であった。将来教育実習へ行くときに、どのようなことが生徒の心をつかむ行動で、どのような行動が生徒にとって良くないのかを事前に学習ボランティアに参加できたことによって、実習の時に役に立つのではないかと感じた。

人に対して何かを教えるという行為は、将来教師などにならないければそのチャンスがないという訳ではない。一般企業に入社した後も自分よりも年下あるいは後輩に対して仕事について指導する場面がある。そのような場面に遭遇した場合に、それまで教育指導を経験したことがない場合だと、自分も不安な気持ちで教えなければならないし、教わる側も教える人の不安が伝わり

もっと不安になってしまう可能性がある。学習ボランティアを通して得たスキルや教育指導の仕方が社会人になっても活かされてくるのではないかと思う。そのような場面に遭遇しても学習ボランティアの経験を思い返しながら、指導ができるようになっていきたいと思う。

学習ボランティアの中でどこまでの話なら理解していて、どこからが理解していないかを生徒の表情から読み取ることが多かった。このような経験は今後の大学生活の中でも大きく活かされていくのではないかと思う。特にグループワークで力を発揮することができるのではないかと思う。グループワークを行っている最中に他の人の表情に注目をしながら、どこまでの話なら納得しているのか、どこは納得していないかを読み取ることができ、他の人の意見を無視しないように注意をしながら進めることが、学習ボランティアに参加したことによって可能となると思うため、表情を読み取るスキルを身に着け今後活かしていきたい。

○お世話になった方への謝辞

担当の松本先生をはじめとして、A中学校の先生方、生徒さん、ご迷惑もおかけしたと思いますが、大変貴重な体験をさせていただきましてありがとうございました。

○後輩の学生へのアドバイス

学習ボランティアでは相手がわかるような教え方が大事になってきます。そのためには事前に行う授業の予習をしていくことが大切になります。自分自身が理解していないところはいくら習ったことがあっても人に教えることは難しいものです。しっかりと予習に取り組んで自分自身がしっかりと理解した状態であることが教えることの第一歩になると思います。

学習ボランティアに参加してみた

渡部 千南

○活動していた中学校

酒田 A 中学校

○これまで参加した日時、教科

9月23日 16:00～17:00 (中2) 英語・理科・社会・数学

9月30日 13:30～14:30 (中3) 数学

11月18日 14:30～15:30 (中3) 数学

12月9日 16:00～17:00 (中3) 数学 計4回

○活動内容

おもに 放課後学習の支援をしていました。学年は中学1年生と3年生を対象にして活動していました。教科は特に定めていなく、教えられるところは全て対応しました。

○学んだこと、気がついたこと

先生の指導方法から学んだことといえば、生徒の目線に合わせ、ゼロから丁寧に教えている姿でした。また、周りの生徒のことも考え、丁寧に接している点もその1つです。私が担当した生徒たちはそれぞれの学習意欲が大きく異なっている印象がありました。どんどんスピードを上げて取り組む生徒もいれば、友だちとおしゃべりをしてなかなか順調に進まない生徒がちらほら見受けられました。しかし、後者タイプの生徒は問題がわからず解けないことが集中力ややる気を妨げていることに気が付きました。したがって少しのヒントを与えるだけでコロっと変わる生徒がよくいました。このことから私は全ての生徒には学習意欲が備わっていると信じています。

○自分なりに工夫したこと

「なぜ、わからないのか」という否定的な発言を慎み、小さなことでも途中の式を書いたり、解けたら肯定するように心がけました。また、答えをすぐ教えるのではなく、生徒に考えさせ答えを自力で解く形式のサポートをしたことです。このことによって自ら解けたという達成感を味わえ、学習意欲が高まるようにするためです。そして、私の理解が不十分な場合は教科書などから探そうと一緒に学習します。それは、なにより自分の勉強にもなりますが、生徒自身のわからない自分に対する不安を和らげることができるのではないかと考えています。他に工夫したことといえば、教えるときに怖いと感じさせないように、姿勢を生徒と同じ目線になるようにしたことです。

○参加してみて難しかったこと

各々の生徒に合ったサポートを考えるのが難しかしく感じました。要するに、生徒とのコミュニケーションです。反省として、シャイな生徒に対しては、あまりガツガツと突っこむのではなく控えめに教えた方がよかったのではないかと思います。逆に、元気でおしゃべりが大好きな

生徒に対しては積極的に質問を尋ねてみたりするのが良いのではないかと考えています。次に、特定の生徒だけにしか教えていないケースがよくありました。なのでもっと他の生徒にも気を配ればよかったのではないかと思います。最後に、自分では解ける問題でも生徒にわかりやすく簡単に教えることが思うようにできず、苦戦してしまったことです。本当に生徒に理解してもらえたかどうか心配で心残りです。

○これまでの活動を振り返り

わたしがこの活動に参加したのは、生徒が学びの楽しさや大切さを知って人生の選択肢を増やしてほしいと思ったからです。そして一緒に学習を行うことにより、それぞれの個性が発揮出来るような人材育成の良い手助けになりたいと考えていたからです。中学生が一生懸命に勉学を努めている姿を見て励まされ、おかげで私もがんばろうとやる気が湧いてきました。また、素直で元気な生徒たちが可愛く、癒されました。このような貴重な経験を活かして今後はさまざまな人の個性を尊重していきたいと思います。

○謝辞

担当の松本先生をはじめとしまして、第A中学校の先生方、生徒さん、ありがとうございました。

第6節 放課後学習支援活動に参加した学生の活動終了後アンケート結果

放課後学習支援活動に参加した学生14名のうち、10名によるアンケート結果である。内訳はA中参加者4名、B中参加者7名である。なお1名はA中およびB中の両方に参加しているためそれぞれ別個に記入し提出している。

設問	選択肢	A中学校 (4)	B中学校 (7)
活動の回数	増やしたほうがよい	1	1
	少し増やしたほうがよい	1	0
	ちょうどよい	2	6
	少し減らしたほうがよい	0	0
	減らしたほうがよい	0	0
	NA	1	0
1回あたりの	増やしたほうがよい	0	1
	少し増やしたほうがよい	2	1
	ちょうどよい	1	5
	少し減らしたほうがよい	0	0
	減らしたほうがよい	0	0
学習内容を生徒は	よく理解している	0	0
	理解している	4	4
	どちらとも言えない	0	3
	あまり理解していない	0	0
	理解していない	0	0
指導法の工夫について (B中)	かなり工夫されている		0
	工夫されている		5
	どちらとも言えない		2
	わかりにくい		0
	とてもわかりにくい		0
教材についての生徒の理解 (B中)	よく理解できている		1
	理解できている		1
	どちらとも言えない		2
	やや難しい		2
	難しい		0
	NA		1
来年度の参加	ぜひ続けて参加したい	1	4
	続けたい	0	0
	考慮中	2	2
	難しい	1	1
参加回数 (A中: 12回)		6回 7回 (2) 9回	4回 (2) 8回 10 ほぼ毎回 (

* () 内の数値は人数を表す

アンケートに回答した学生は概ね熱心に参加した学生であり、活動に積極的に関与している様子がうかがわれる。ことに初めて参加した1年生は4人全員が来年度もぜひ続けて参加したいとの意向をもっている。なお今年度は1年生と3年生が中心となって活動を進めたが、3年生は進級に伴い、来年度は就職活動や卒論作成等の課題への取り組みが生じるため、どの程度この学習支援活動に参加できるか判断がむずかしい状況にあるようである。

【放課後学習支援活動に関する感想、意見、今後工夫したい点（自由記述）】

アンケートの自由記述欄に記載された内容をそのまま以下に記す。

- ・教職課程をとっているが、中学生に勉強を教える機会がない。この活動を通してどのような指導がわかりやすいのかを知ることができ、面白さを感じながら活動に取り組むことができた（1年）
- ・これまで中学生に勉強を教えたことがなかったが、教えることによって自分のコミュニケーション力が向上し、わかりやすく教えられるようになった（1年）
- ・楽しんで参加することができた。教えることの難しさや楽しさを知ることができた。またコミュニケーション力の向上につなげることができた。来年度以降も継続したい（1年）
- ・とても楽しい。来年度も続けたい（1年）
- ・回数を重ねるごとに生徒が解ける問題が増えていくのを感じた（3年）
- ・さまざまな視点から教育活動を知ることができた（3年）
- ・この活動を後輩にどのように引き継ぐかが難しいと思うが、しっかりつないでいきたい（3年）
- ・活動中私語が多い生徒への働きかけ方を工夫したい（3年）
- ・生徒にわかりやすいプリントづくりが大切。スピーキングやリスニングを意識した授業をしたい（4年）

第4章 教育支援活動の実施体制とそのサポート方法についてのヒアリング調査

第1節 調査概要

他の大学において学生の教育支援活動は、どのように実施されているのだろうか。また、そうした学生の教育支援活動を、大学の教員は、どのようにサポートしているのだろうか。本調査では、東北地域にある2つの大学において、学生の教育支援活動を担当している教員2名に、國眼・白旗が聞き取り調査をおこなった。

調査の概要および収集した資料は、表1のとおりである。調査方法は、半構造化インタビューを採用している。A大学は、4年制の大学で主に小学校教諭、幼稚園教諭、保育士を養成している大学である。B大学は、教育学部を含む複数の学部を有している4年制の総合大学である。

＜表1 ヒアリング調査の概要および収集資料＞

	A 大学	B 大学
日時	2016年11月14日15時～	2016年11月25日13時半～
場所	教職実践センター	B大学大学院教育学研究科
対象者	教職実践センターのS先生	教育学研究科教員のG先生
インタビュー時間	約70分	約70分
質問事項	スクールサポーターに関する事項 ①実施体制 ②活動内容 ③募集方法 ④学生へのサポートの仕方 ⑤派遣先との連絡・調整のあり方 ⑥学生が活動で得ているもの ⑦活動をすすめていくなかで難しいと感じる点	①学校ボランティアの実施体制 ②活動内容 ③学生の募集方法 ④顧問の教員と学生との関係の取り方（どこまで学生に任せるのか） ⑤顧問の教員と教育委員会など派遣希望先との調整 ⑥学生が活動で得ているもの、顧問をしていて難しいと感じている点
収集資料	<ul style="list-style-type: none"> ・大学パンフレット ・「教育臨床体験」のシラバス ・教育ボランティアのオリエンテーション資料（学生用） ・「スクールサポーター（教育ボランティア）事業について」 ・「教育活動推進員」（H市）、「学校サポーター」（S市）、「かみのやま寺子屋事業」（K市）の募集資料など 	<ul style="list-style-type: none"> ・「B大学学校ボランティア」募集資料 ・登録フォーム ・「学生サポートスタッフ Q&A」 ・B大学学校ボランティア説明会用資料 ・学生サポートスタッフ研修会資料（S市教育委員会）

第2節 A大学におけるヒアリング調査の結果

2016年11月14日、A大学教職実践センターを訪問し、教職実践センター教員のS先生から話をうかがった。インタビュー時間は約70分であった。A大学の学生は、数多くの小中学校でスクールサポーター（教育ボランティア）として活動しており、S先生はその担当教員の一人である。インタビューでは、スクールサポーターに関する事項を中心に、その①実施体制、②活動内容、

③募集方法、④学生へのサポートの仕方、⑤派遣先との連絡・調整のあり方、⑥学生が活動で得ているもの、⑦活動をすすめていくなかで難しいと感じる点についてお話をうかがった。以下は、S先生のインタビュー内容をまとめたものである。資料からの引用に関しては注に示している。

A大学では、「小学校及び地域社会に出向き要請に応じてボランティア体験をすることによって小学校の子どもの実態、学校の一日の流れ等を体験し、将来教員としての基礎的な経験を積むとともに学外でいろいろな人とのかかわりをとおして自分自身の人間としての成長を図ること」を目的とする「教育臨床体験」という科目が開講されている³。学生は、単位認定に係るボランティア等をおこない、合計45時間の活動で1単位の単位認定がされる。単位認定に係るボランティア等として「ア 近隣市町の小学校に出向き、スクールサポーターとして学習支援業務等に従事する」、「イ 大規模校観察実習に参加する」、「ウ 小規模校観察実習に参加する」、「エ その他行政機関や民間団体がおこなうイベントに協力者として参加する」などがシラバスに示されている⁴。学生は、「教育臨床体験」のシラバスに示されているボランティア活動のほか、各市町村または各学校教育機関が実施している有償のボランティアにも参加しているが、有償の場合は、単位認定に係るボランティア活動の時間数として数えることができないとのことであった。この「教育臨床体験」という科目は一昨年度から開講されているもので、単位取得までいたった学生は2年目ということでまだ少数とのことであった。また、必修ではなく選択科目である。

A大学は、4年制大学となって7年目で、小学校教諭、幼稚園教諭、保育士などの職種を希望する「目的意識がはっきりしている」学生が多く在籍している。1学年約80名の学生が在籍しており、そのうちの約半数の学生が小学校教員免許状の取得を希望している状況であり、そうした学生がスクールサポーターを希望しているとのことであった。

「自分の将来のこと、例えば教員採用試験、それから実際に教員になったときの子どものかかわり、あるいは学校現場の様子、先生方のサポートの様子などを実際に見ておきたいという希望を持って、小学校におけるスクールサポーターを希望する学生が多いようです」（S先生）

スクールサポーターは、主に「ア：通常学級での個に応じた学習指導支援」「イ：特別支援学級での個に応じた学習指導支援」「ウ：保健室や特別室で学習する児童生徒の学習指導支援」「エ：実技等を伴う教科での学習指導支援」「オ：ア～エ以外での学習又は諸活動への支援」のいずれかの支援をおこなうことになるとのことであった⁵。

Y市で実施するスクールサポーター（教育ボランティア）事業の場合は、以下のような流れになるとのことであった。まず、年度のはじめにY市教育委員会が市内の各小学校にスクールサポーターの必要性の有無および必要な場合の人数を確認し、その情報が大学側へ送られてくる。それと並行してA大学でも学生への呼びかけをおこなう。その後、Y大学・A大学・Y市教育委員会で集まり、派遣する学生の人数などの調整をおこなうとのことであった。派遣する学生が決定すると、教育委員会から学校側へ連絡される。

Y市以外の場合は、学生が直接小学校に連絡を取り、学校の了解を取る。了解が取れると、大学

³ A大学「教育臨床体験」の「シラバス（平成28年度）」より引用。

⁴ 同上。

⁵ A大学人間科学部子ども教育学科「スクールサポーター（教育ボランティア）について」。

側から先方の小学校へ依頼状を出しているとのことであった。

「Y市以外の小学校、つまり本校の学生も東北各地から来ていますので、夏休み中、実家へ帰ったときに、出身の小学校で、スクールサポーターをしたいという学生もいます。そのようなときは、学生が直接その小学校に連絡を取り、夏休み期間中の何日から何日まで、スクールサポーターとしてこのように活動したいのですけれどもよろしいでしょうかと、学校の了解を取ります。…（中略）…ケースとして多いのは自分の出身小学校へ直接連絡するケースや、元担任の先生だった恩師に電話をして、スクールサポーターをやりたいと申し出て、了解をもらう。そういうケースが多いですね。」（S先生）

「例えば、県内ですと、T市から通っている学生が多いので、午前中が空いている日、T市の母校に行ってサポーターをし、午後のJRで学校に来るなどの使い方をする学生もいます。…本大学近隣の、例えば〇〇小学校、〇〇小学校、〇〇小学校あたりは、比較的、自転車でも行けるようなところなので、そういった学校には、空きコマを利用しています。しかし学生には、水曜日が1コマ目、木曜日が3コマ目など、そういうことはかえって、学校に迷惑なので、ある程度の時間が取れるところを、自分で先方の先生に言ってきなさいと話しています。ですので、2、3時間まとまって取れるところを選んで、行っています」（S先生）

学生は、毎週決められた曜日、時間に小学校においてスクールサポーターとして活動する。複数の学生が同じ小学校でスクールサポーターをしても、学生の活動可能な時間が異なる場合、それぞれがそれぞれの活動可能な時間に小学校へ活動にいつているとのことであった。

「例えば3名が1つの小学校行っているとします。Aくんは月曜日の1時間目から3時間目まで。Bさんは、水曜日の、3・4・5時時間目など。で、Cさんは、金曜日の午前中など、ばらばらです。…学校では、月曜日の1時間目と2時間目に、（スクールサポーターが）欲しい学年はありませんか、月曜日の午前中だったら、うちの学年欲しいなど、そのように多分なっていると思います。だから1学期なら1学期、コンスタントに行かれるようなところを決めます」（S先生）

なお、大学の授業が後期に入り、活動時間を変更しなければならない場合は、学校側の了解を得て実践センターに連絡することになっているとのことであった。このように、実践センターにおいて、各学生がどこで何曜日の何時から活動しているのかどうかを把握している。ボランティア活動をおこなっている学生は、市内、市外、県外を合わせて、104名ということであった。学年は限定せず1年生から登録を受け付けている。内訳としては、2年生、3年生が多いとのことであった。

スクールサポーターとして各学校へ行くことが決まった学生には、教育実践センターが作成したファイル（学年で色を分けている）を手渡している。このファイルに、出勤時間、退勤時間、活動内容を書き、自身の印鑑を押印したうえで、派遣先の先生の印鑑をいただくとのことであった。

「例えば、1時間目に1年2組で算数の補助、2時間目は3年生で国語の補助というように書いてきます。そして簡単に今日の反省を書いて担任の先生、あるいは教頭先生や教務の先生から印鑑をもらってきます」（S先生）

A大学では、大規模校および小規模校における観察実習を実施しており、「教育臨床体験」の単位修得必要な時数としてカウントすることができる。大規模実習では東京都のM市の600名・700名の規模の学校に、1日研修に行っており、小規模校の観察では、県内の小学校に、観察実習に行くとのことであった。

さらに、スクールサポーターとは別に放課後のボランティア等としても学生は活動しているという。紹介していただいたのは、「教育活動推進員」（H市）、「学校サポーター」（S市）、「かみのやま寺子屋事業」（K市）、Y市の「理科教育センター」などにおける学生の教育ボランティア活動であった。

まずは、H市の「教育活動推進員」についてお話をうかがった。

「H市では、教育活動推進委員を募集しています。大学生や教員のOB、地区の人といった方々を、アフタースクール、放課後の教室の指導者として募集します。・・・本校にも4月に、H市の教育委員会の担当者が、説明にいらっしゃいます。・・・これにもY大学の学生も何名か行っています。本校の学生も行っていますし、地区の方々も何名か来ているということです。この授業は時間的には放課後なので、例えば午後から授業のない学生、特にH市なので、H市出身の学生などが行っています。昼頃に学校の授業が終わって、JRでH市まで行って、ボランティアをして家に帰るといような。これは、曜日とかが決まっていて、今年は第1、第3の金曜日です。（H市から）募集が来ているので、学生たちへ呼びかけ、今年は13名が行っています」（S先生）

「（H市の場合）先ほどお話したスクールボランティアと違うのは、謝金が出るのですね。ですから、学生たちは、もらっているわけです。これは一種のアルバイト的な、そういう感じもあるのかな。しかしながら子どもたちの、いろいろな指導をしますので、将来の自分の勉強にはなると、そんなことになります」（S先生）

「私が行ったときも公民館長さんかな。結局H市教育委員会とそれから地区の公民館とタイアップして、地区の人たちの人材活用みたいな感じも、やはり公民館が中心になって話をかけたりしているというようなことでしたね。」（S先生）

次に、S市の「学校サポーター」についてお話をうかがった

「S市のR中学校の例をお話します。これは教育委員会などの行政組織が窓口になっているのではなくて、R中学校独自のもののような気がします。学校サポーターとしてR中学校で、地域に開かれた学校づくりを進めているのだということです。・・・S市ですので、R中学校出身の学生もいるわけです。R中学校だけではなく、隣の中学校を卒業したという学生もいるわけです。そうした学生に、行ける日があったらどうですかと話しかけたら、行けるというので、R中学校出身

の学生が3名ぐらい、H市出身の学生が2、3名で、計5、6名の学生が行っています」(S先生)

次に、K市の「かみのやま寺子屋事業」についてお話をうかがった。こちらも有償とのことであった。生涯学習課が担当で、教育委員会が募集をし、火曜日・木曜日の放課後15時からの活動とのことであった。現在、3名ほどの学生が活動しているとのことであった。

最後に、Y市の「理科教育センター」における科学実験教室のボランティアについてお話をうかがった。教室がおこなわれる土曜日が大学の授業日のため、参加できる学生数は少ないが3名ほどが10月29日の活動に参加したとのことであった。このボランティアは無償のため、時間数としてカウント可能とのことであった。

「・・・このような行政機関で実施している子どもを対象にした様々な事業にお手伝いに行くこともサポーターだと考えています。教育的なボランティアであるという認識でいるということです。やはり子どもたちと接して、何かしらその子どものこととか、あるいは話しかけ方、あるいは指導者の対応の仕方とか、そのようなことを学んでくるのだろうというふうに思っていますので、それは将来、教員になったときとかに役に立つ、というようなことでやっているということです」(S先生)

A大学では小学校教員免許状を希望する者は、3年次に小学校において主にY市内で教育実習を実施することとなっている。1学年に教員免許状を取得するものは約30から約40名の学生で、今年はY県への小学校の採用試験合格者が5名(現役)、各県の結果を合わせると13名の合格者、複数県の合格者を含めるとその数はさらに多くなるとのことであった。A大学では、小学校教員免許状の希望者や採用試験を目指す学生へスクールサポーターとしてボランティア活動をすることを勧めているとのことであった。

「1年生から年に2回、前期と後期、個人面談しますので、将来の希望を聞いて、幼稚園の先生、小学校の先生になりたい。そうか、じゃあスクールサポーターできるのだったらしておきなさいと、そういうことを話しますので。教育実習もちろんですが、実際、採用試験の面接で、どこの県でしたでしょうか、『スクールボランティア、教育ボランティア、スクールサポーターのような経験ありますか』という、質問があったそうです。そして『スクールサポーターでどのようなことを学びましたか』という質問があったそうです」(S先生)

「大学に入るまでは教育は受け身なわけですね。つまり受ける側です。そして、入ってきて、手伝いでも何でも、先生側の方に立った子どもの見方を少しでも、その入口でもしてくるわけですね。そうすると、いや忙しかったとか、あるいは子ども同士がけんかしたときに、その担任の先生がちょうどいなくて、そのときにどうしたらいいか迷ったなど、そういったところが非常に驚きであり、また新鮮に、インパクトがあって、受け止めてくるみたいですね。見る視点が変わる。ただ、その感覚が、将来に向かって、採用試験を受けるっていうふうになると、非常に大きな動機づけになったりしてきますよね」(S先生)

スクールサポーターとして活動した学生の継続性をお聞きしたところ、ほとんどの学生が継続するとのことであった。

最後に、学生の教育学習支援を担当するなかで難しいと感じることをお聞きした。

「学生たちの希望と、派遣を希望する学校との人数の調整とか、その辺ですね。10人欲しいと言われても、学生が10人希望しなというような場合もあります。・・・反対に、例えば5名欲しいという学校に10名希望しているなど。これはこちらの問題なので、誰と誰は、教育実習もそこに行くようになるから、優先ということで、他の学生にはまわってもらったりして、調整していますけども。うまく学生たちの希望と、受け入れ学校の希望が合わないというところ、その調整が春先、大変ですね」（S先生）

「・・・Y市の場合、実際に学生が行くのが6月ぐらいになってしまうのですよ。そうすると、ある学校では、希望したのだけれどもいつから来るのだとか、そういうようなこともあったので。やはり調整に時間がかかる。もっと早く派遣したいって。そういった意味では、例えば、自分で見つけて、T市の〇〇小学校に行けるってなったら、すぐ行けるわけです。Y市の場合はそういうふうにやっているものですから、なかなかスタートするまでの時間がかかります。この辺ちょっと何とか改善できないかなと思っていますところですよ」（S先生）

以上がS先生からお話をうかがった内容の概要である。

【謝辞】調査に協力してくださったS先生に感謝を申し上げます。

第3節 B大学におけるヒアリング調査の結果

2016年11月25日、B大学大学院教育学研究科を訪問し、G先生から話をうかがった。インタビュー時間は約70分であった。B大学では、S市教育委員会との提携事業として「B大学校ボランティア」事業を実施している。G先生は学校ボランティアの顧問を担当している。インタビューでは、①学校ボランティアの実施体制、②活動内容、③学生の募集方法、④顧問の教員と学生との関係の取り方（どこまで学生に任せるのか）、⑤顧問の教員と教育委員会など派遣希望先との調整、⑥学生が活動で得ているもの、顧問をしていて難しいと感じている点についてお話をうかがった。

学校ボランティアとして活動を開始するまでの流れは、メーリングリストに登録をする、配信されてくる募集リストから、参加してみたいボランティアを決める、事務局が学校側に募集状況を確認、募集が継続していたら「登録フォーム」が送信される、学校と日程相談をする（学校側から電話にて直接連絡がくる）、活動開始という流れとなる⁶。なお、活動前にはS市の開催する説明会（研修）か、その説明会を受講した学生による学内の説明会（研修）に参加することが求められている。活動時の保険代はS市教育委員会が負担する。交通費は遠隔地を除き、基本的には学生の自己負担となっている。活動は基本的にはS市のものは無償で、その他の市の活動の中には有償の活動もあるという。

⁶ 「B大学学校ボランティア 説明会用資料②」より該当箇所を引用。

「基本的にはS市の学生サポートスタッフ事業というのに乗っかっているかたちでやっております。…S市教育委員会の説明会が、一応研修会という位置づけになっていまして、そこで研修を受けた者が学生ボランティアといたしますか、S市側からするとサポートスタッフという位置づけなのですけども、そういうかたちで登録されるということになります。」(G先生)

「…S市としては、資料を用いて説明をおこなえば、研修を受けたというように一応認めてくれるということで、そういう説明会を随時開くというかたちですね。説明会といっても、1人ぐらい、ぼんと来たりするので、普段はそれに対応して説明会をするというかたちです。S市の方を招いての説明会は大体5月、4月の終わり頃とか5月上旬ぐらいに1回開くのですが、なかなか数が集まらなかつたりして苦勞をしています。」(G先生)

学校ボランティアの事務局は、現在4名(学生3名・教員1名)で活動しており、小中学校からの依頼を、掲示・メーリングリスト・ホームページで募集したり、必要に応じて小中学校に直接電話して、依頼について質問・交渉をしたりする「募集活動」、活動希望・活動中の学生からのメールのチェックやその対応など、学生がスムーズに活動をはじめられるように、また、活動中に困ったことがあったときにサポートする「学生さんのサポート」、ボランティア活動をおこなった学生を集め、その活動がより豊かなものになるような報告会を企画するなどの「活動報告会などの企画・運営」を仕事としている⁷。

基本的に1人週1回、大体2時間程度、教育ネットワークセンターの部屋を借りて、作業をおこなっている。アドミニストレーティブアシスタントという制度があり、事務局員は事務的には非常勤雇用職員という扱いになるとのことであった。時給800円で一人あたり月4千円から5千円ほどとのことであった。

「各中学校や小学校からボランティアの依頼が、S市からファクスで送られてきますので、その情報を私どものほうとしてはメーリングリストというかたちで、登録した学生に定期的にメールを配信しております。その中で、自分の興味、時間に合ったものがあれば、ここで活動したいですと連絡いただきまして、事務局としては、まだ空いていますかとか、まだ募集していますかといったことを中学校さんのほうに連絡をして、まだ募集していますってことになったら、そこでようやく、それでは直接連絡を取ってくださいということでやっています」(G先生)

「…事務局という組織があるわけですけど、…これは私どものほうの独自の組織なのですが、これ自体も学生のボランティアというよりは、お金を出しているので…今3名ですか、学生が事務局のスタッフというかたちで活動しています」(G先生)

「要するにサークル的なかたちで何十人とか確保していて、それを派遣しますというやり方ではないのですね。…ハブ的な役割だけをしていて、学生を束ねてはいないのです、ここの学校ボランティア事務局は。そういう意味での難しさはあります。要するに人を確保するのに苦勞しま

⁷ 「B 大学学校ボランティア 説明会用資料③」より該当箇所を引用。

すし」(G先生)

事務局では、4月に大きな説明会を実施し、その後、希望者に応じて随時説明会を実施しつつ、2月頃に1年間の活動報告という形で、報告書の作成と報告会を実施しているという。4月の説明会と報告会の際にはS市の職員も同席し、報告会の際には活動した学生に感謝状が手渡されるという。活動報告は、活動終了時点で事務局に提出する。登録者の半分は次年度も活動を継続しているとのことであった。

各学校における活動は、単発の活動募集もあれば、定期的な活動募集もあるという。

「例えばI岳に登るときに、一緒に登っていく補助みたいな、本当に1日だけとか2日間という募集もあります。…あとは放課後学習会、土曜学習会などを行っている学校から、サポートスタッフを送ってほしいというのもあります。あとは、いわゆる教室から飛び出していってしまう子などの対応をしてほしいというのもあります。こういう募集に関しては、来られる日にいつでもいいので来てくださいという募集なども結構ありますね。…ただやはり学生側は、放課後の学習のサポートですとか、そういったものの方がやりやすいというはあるみたいで、たまに部活の補助みたいなことで、自身が得意とする競技の指導の補助というかたちで入っていく子ども、年に1人2人くらいはいますね」(G先生)

「去年は、I中学校に結構な数のスタッフが行っていたようです。特殊なケースなのですが、当時のI中学校の先生がこの大学の学部の出身で、出身の講座の人に声をかけて、5・6人程か土曜学習会に呼んだということもありました」(G先生)

事務局員(顧問の教員1名と事務局員の学生3名)は、週に1回、大体お昼に集まり、ミーティングをおこなっている。

「…各自入れる日に作業していますので、今週はどんなことをやったかなど、作業の確認をして、そろそろあれもやり始めなきゃいけないねとか。あと、例えば何曜日にこういう相談があったらいいのだけど、他の人の担当の時に来ましたかとか、なかなか連絡しきれない部分などを振り返ります。特に何もなければ15分ぐらいで終わりますし。説明会や報告会の準備が近くなってくると、誰がどの部分を書くとか、誰がこの部分を報告するのかと役割分担を決める。…こういうやり方にしたのはおそらく去年か一昨年からなのですが、進行確認がしやすいので非常に楽なのと、実質私が顧問というかたちですけど、学生たちがいなかったらと思うとぞっとするのですね」(G先生)

「実際業務の中身を振り返ってみると、非常に事務的な仕事が大半なので、そういう意味でいうと、やはりきちっとお金を払ってやってもらっているか。…私としては働いてもらっているという意識でやっています。ですから私の中では、事務局員はボランティアという位置づけではないですね。あくまでもボランティアは、実際に学校に行って活動する方ですね」(G先生)

事務局員のリクルートは、実際に活動をしている学生に声をかけたりなどしておこなっているとのことであった。現在は、事務局活動の中心となる学生がおり、学生に任せながら活動を行うことができているということであった。

「今、たまたま4年生の子で、彼はもう1年生の頃から入っていて、積極的にやってくれる子がいるので、ある意味では助かっていて、彼が多分大学院にも上がるので、本当に助かっているなという感じで。そういう子がいれば、本当に何の心配もないので。彼が全部、週1回のミーティングとかも仕切って、今週の振り返りをしますとか言いながらやってくださるので助かっていますけど、そうではない時期もあったものですから、当然。あの頃は本当に、苦労しましたね。（当時は）毎週の進行確認とかもなかったものですから・・・」（G先生）

実際に活動している学生についてたずねてみると以下のようなお話であった。

「B大学の傾向でいいますと、大学院生が半分ぐらいです。15人とか20人ぐらいのうちの半分ぐらいが大学院生です。要するに学部生が、授業で結構忙しくて、合間の時間に行けるところというと、本当に近くの中学校とか小学校。今年は少ないですけど、大学のすぐ近くの小学校なんかは5人ぐらい行っていた時期とかはありました。・・募集がたくさんくるのに対して、B大から行く人があんまりいない。大学院生になると、今度時間はあるので、自分の研究だけだとちょっと煮詰まってしまうっていうのがあるのか、意外と大学院生が何かで調べて、そこから連絡してくるというパターンが多いのですけども。・・・いわゆる教育なり、学校での授業補助であったり、放課後の学習支援だったり、そのものに関心をもってという人が、なかなかそんなにはいないという状況ですね」（G先生）。

「・・・登録だけは結構くるのですけれども、活動につながるころまでは、やっぱりなかなかいいですね。・・・1、2年生あたりには、オリエンテーションで集まる機会もあるので、広報だけは相当するのですけども、そのあたりの率はものすごく低くて。一方で、全く案内などをしてない、しかも教育学部じゃなくて、理学部とか法学部とかの大学院生が急に連絡してくるという感じですね。だからどんなふうに広報を打ったらいいのかというのは、事務局のミーティングで議論をするのですが、なかなか難しいですね」（G先生）

B大学には、全学対象のボランティア支援室があり、学生主導によるボランティア団体もあることから、大学全体としてのボランティアの数はかなりの数ではないかと話されていた。

「いわばニッチじゃないのですけれども、（ボランティア団体に）所属するわけでもないし、でも学校とかで、それこそ自分の専門というのでしょうか、理科でもいいし数学でもいいのですけれども、そういう特技をいかして何か教えたいなって思ったときの受け皿みたいな感じになっていますね」（G先生）

事務局の運営に関しては、リーダーになる子をうまく見出せるかどうかかが1つの鍵となると

いう。また、集まる時間を決めておくことも重要だということであった。

難しいと思う点をお聞きすると、どうやって活動する学生を集めるかということであった。今後の参考のために説明会ではアンケート等を実施しているという。

「本当にやりたいという人は説明会とかも来ていなくて、チラシを見て、あるいはネットで見てやりたいのですってというような人が、実際活動までつながったりするので、難しいですね。1年生はいっぱい来てくれたりするのですよ、説明会やると。でも、実際に活動まではいかないですね、1年生は。…時間的にもそうですよね。ほかにやりたいことも結構あるでしょうし。そういう意味でいうと、ボランティアの意義とかそういったものを話す授業の一環みたいなことで、こういうものを紹介すればまた違うのしょうけど。ただただ学校ボランティアやっていますだと、なかなか活動までは結びつかないですね。大変苦労していますね、この辺は。」(G先生)

次に、S市教育委員会と顧問の教員とのやり取りをうかがってみると、ほとんど事務局の学生がやり取りを行っているとのことであった。また学生間で事務局員に必要なスキルも伝達される仕組みがあるという。

「…学生が教育委員会の人とやり取りすると、多少難しい部分も出てくるのですが、そこは先輩がいろいろ教えてあげて。OJTじゃないですけど、最初の頃は同じ日に入ってもらいます。例えば2時間の勤務のところで先輩に入ってもらって、…パソコンのExcelの表の作り方から、市教委の人とのやり取りまで、その場で、学生間でスキルを伝達してもらっている感じで、私は何もしてないのです。そんな感じですね。そういう意味でも、人を途切れさせないように何とか入れないと、1回切れちゃうと自分が教えなくちゃいけないので。…今はたまたま、4年生の子が積極的にばりばりとやってくれるので、彼に今ある種預けているというか、頼っているところなのですが。彼が卒業する前に人を入れて、うまく育てないといけないとは思っていますけど。」(G先生)

「(市教委も)了解されているというか。…事務局自体を学生がやっているのはB大さんだけですよね、みたいな。…だからすごいなと思いますとおっしゃってくださるのですが、それはそのぶん、多少ご迷惑もおかけしたりするのかなとは、思ったりはしますし、難しいところですね。」(G先生)

次に、G先生の前任校での学校ボランティアに類する活動も紹介していただいた。そのなかで、前のお話にもでてきたように、学生の集まる場所、必ず集まる時間があることの重要性を強調された。

「R大学にいたのですよね。離島に学生を派遣するというのをやったのです。本当にいろいろと企画を作って、交流会の中身なども作って、中学生と交流したりします。また、夏休み中の合宿で勉強を教えたり、そのあとでレクリエーションなどを一緒にして、2泊3日みたいなものを向こうの青少年の家の人などと組んで企画したりしたのです。…初年度は大体人がたくさん来るの

で、9人ぐらいで行くと、R大の学生が来たというので、I島の子たちは喜ぶわけです。しかも出身者をベースに派遣すると。同じ学校でかつて学んでいた先輩が、R大生になって帰ってくるということをやっていて、結構迫力あるわけですね。2年目になってその子たちに声をかけたら、今年ちょっといろいろあってみたい。…3人ぐらいで行ったら、本当に授業の補助しているぐらいの感じしかなくなって、非常に迫力がなくなってしまって、イベント感がなくなっちゃったのですね。これは困ったなあと。やっぱ5人以上いないとだめだな、となって。」(G先生)

「そのとき考えたのは、出身者にこだわる必要はないと。もうそういう活動に興味ある人を集めて、あと毎週何曜日の何時間目とかに大体夏休み、大学にとっては夏休みだけど、9月ぐらいだと学校は動いているけども大学生は休みっていう時期をうまく使って企画して。R大では学期中に毎週集まれる日に、この部屋解放するから、ここでいろいろ企画とか練ったりしなさいねっていうかたちでやって。そのときは自分も、(学生が)集まっているだろう日・時間帯にはそこへ行って、どこまで話しすすんでいるのだろうみたいなこと言って、アプローチして、そろそろ決めないとまずいよとか言ったりします。学生にとってみれば、企画を練ったりすることは、一応はメインなんですけども、出身の子からすれば、自分たちの、みんな学部とかもばらばらな人たちがその時間にその部屋に行けば、かつての同級生なんかも集まっているので、ちょっとたむろするような部屋にしといて。だらだらしていてもいいし、ある程度の、そろそろこの時期にはこれできてないとまずいのではないかということだけ、こっちがたまにいて管理するだけにしとくと、あとはだんだん勝手に回ってくるので。集まる日を決めることと、理想的には場があるといいですよ、空間が。」(G先生)

「例えばボランティアサークル的に動くのであれば、彼らがいつでも使える部屋とかがあると、部屋とホワイトボード1枚置いとけば、今年は何やるとか書いておいて。それで今日は来られるけど、次の週は来られないという子も出てくるので、ホワイトボードに常に書かせておけば、連絡がきてないとか、よくわかってないとかみたいなことを防げますし。結構何でもネットで可能だからというのにあぐらをかいたら、すいません、連絡忘れていました、の一言で終わっちゃったりするので。…そういう意味では時間と、理想的には場ですね。場所があると、自分たちがサークル的に動いているのだという意識が徐々に芽生えてくると、あとは自然に回っていくんですね。来年は誰か声かけるからみたいなことがどんどん起こってくるので」(G先生)

最後に、本学の活動についてもアドバイスをいただいた。

「想像で申し上げて申し訳ないのですが、2校行って、分けて人が動いているということだと、やはり自分たちが一つの固まりっていうのですか、そういうのを持てるような仕掛けができるといいですよ。そうすると自発的にいろいろ企画してというのが回っていくので。」(G先生)

「前の大学のときの話で申し訳ないのですが、3人に減ったときは、こちら危機感持って、…

先生方とか教育委員会の人を集めて、どんなことをやったら、結局 M 島の子どもたちにとって意味があることをできるのかということ話し合ったのですね。そしたら本音も出てきて、やっぱりもっとこういうふうにしてもらいたいとか。・・・年度の終わりなどにうまく反省会的なことを、先生にも入ってもらっておこなうといいかもしれません。」（G 先生）

【謝辞】 調査に協力して下さった G 先生に感謝を申し上げます。

第5章 地域課題解決フォーラムにおける発表についての報告

2016年12月3日、東北公益文科大学で開催された「第3回 地域課題解決フォーラム」において、今年度の活動状況について発表を行った。発表題目は、「酒田市における放課後学習支援」である。発表者は、國眼眞理子・白旗希実子（東北公益文科大学）、大泉春風・金田直・菊地由浩・須藤洋祐・横山広太郎（東北公益文科大学3年）、本間亮平（東北公益文科大学4年）である。

「地域課題解決フォーラム」における発表は、活動の中間報告としての位置づけをもっている。発表前に、放課後学習支援をおこなっている学生らが集まり、ワークシートに記入しながら、これまでの活動の振り返りを行い、発表内容をまとめていった。発表の練習では、発表のタイムを測るなどして、一年生も協力をしてくれた。

フォーラムにおける発表は、学生にとって、自身の活動の振り返りとなるとともに、自身の活動成果を発信する力を向上させたようである。発表会場では、活動先の中学校教員からもご質問をいただき、充実したものとなった。

次ページからの資料は、「地域課題解決フォーラム」で配布した発表資料である。

【初出】「地域課題解決フォーラム」(配布資料)、2016年12月3日。

2016年12月3日 地域課題解決フォーラム 於:東北公益文科大学

酒田市における放課後学習支援

國眼真理子(東北公益文科大学) ○白旗希美子(東北公益文科大学)
○大泉春風(東北公益文科大学3年) ○金田直(東北公益文科大学3年)
○菊地由浩(東北公益文科大学3年) ○須藤洋祐(東北公益文科大学3年)
○本間亮平(東北公益文科大学4年) ○横山広太郎(東北公益文科大学3年)

1

背景

・学校・家庭・地域の連携による教育支援活動の促進が目指されている。

・平成28年2月「学習支援における学生ボランティアの参加促進について(依頼)」

→学生ボランティアへの注目が高まっている。

2

学習支援ボランティアに関する事業

- 学校・家庭・地域の連携協力推進事業:文部科学省
 - ・学校支援ボランティア
 - ・地域未来塾
- 子どもの生活・学習支援事業:厚生労働省
- 生活困窮世帯等の子どもに対する学習支援事業:厚生労働省
- 地方公共団体や地域のNPO等が独自におこなう取り組み

など多様に展開。

3

学習支援ボランティアの実施形態

- ・各学校と大学との間の学校間連携
- ・教育委員会等の教育行政機関と大学との連携
- ・福祉関係の行政機関と大学との連携
- ・NPOが調整(学生の登録、行政・学校からの受託など)
- ・各団体、各自治体からの募集に対し学生が個別登録

→実施形態も多様

4

<先行実践・研究> 学校における学生ボランティアの意義

・地域の小・中学校における「開かれた学校づくり」の一環を担う活動としての意義。
教職課程を履修する学生の教育現場体験の機会の確保(瀬戸、2012)

・学生たちが「自分たちで学びあう」(入江、2014)

・授業補助有:意思決定の幅を広げる効果
授業補助無:教師の役割・責任感を思い起こさせる効果(姫野、2006)

5

<先行実践・研究> 学校における学生ボランティアの課題

・教育委員会と大学が連携し、教員志望の学生を派遣する活動。「送り出す側と受け入れる側の責任問題をどう考えるか」(阪根、2006)

・大学および学校の教員がボランティア・コーディネーターの役割を兼務している状況。「学校地域支援本部」等の組織体制を整備しボランティア・コーディネーターを中心とした活動の調整が必要になる」と思われる(瀬戸、2012)。

6

本発表の目的(1)

- ・国の施策及び実施形態は多様に展開。
- ・学生の参加形態、学生のキャリア展望によって、学生にとっての意義も異なる可能性。
- ・大学と学校の連携のあり方によっても課題が異なる。

→地域の実情(ニーズ)と学生のキャリア展望に応じた学生ボランティアのあり方を模索する必要性。

7

本発表の目的(2)

本発表では、酒田市において放課後学習支援をおこなう学生の実践から、彼らが得たもの・学んだものを明らかにするとともに、実践をおこなっていく上での課題(学生側の視点)を整理し、今後の実践に活かしていくことである。

8

東北公益文科大学 学習ボランティアの概要

<経緯>

2012年: B中学校にて学習ボランティア活動開始(無償)。
B中学校と公益文科大学の学校間連携。

2016年: 教育委員会企画管理課との連携開始。A及びB中学校での学習ボランティア活動開始(有償)。

<今年度の事業>

- ①中学生の放課後学習支援
- ②夏休み宿題お手伝い教室への参加(8月5日)
- ③中学生対象英語力パワーアップ講座(8月8~10日)

9

東北公益文科大学 学習ボランティアの実施体制①

- 登録学生: 15名
 - ・中学生の放課後学習支援への参加14名
 - うち、A中学校9名、B中学校8名(兼任有)
 - ・学年・・・1年生6名、2年生1名、3年生6名、4年生2名
- 活動日: 原則週1日(金曜)
- 活動時間: A中学・・・授業補助の有無により変動
B中学・・・16時半~17時50分(変更有)

10

東北公益文科大学 学習ボランティアの実施体制②

- 学生組織
 - ・中学校ごとにリーダー、副リーダーを配置
 - 学校教員(担当教員)との直接的なやり取り、登録学生への連絡調整をおこなう。
 - ・活動ごとに簡単な報告書を作成。
- 学生と大学教員の関係
 - ・必要に応じて、メンバーと大学教員で活動のふり返りを実施(アドバイザー的立場)。

11

A中学校での取り組み

12

活動内容

- ・毎週金曜日(9月～)
- ・教科・・・数学(主に基本計算)
- ・プリント学習による質疑応答
- ・対象:主に三年生
- ・開催場所:A中各教室に2名程度ずつ

13

学んだこと・得たもの

- ・事前準備の大切さ
- ・個別対応の大切さ
- ・答えを教えるのではなく考え方・解き方を教える

14

生徒と接する際に心がけていること

- ・生徒の目線に立つ
- ・信頼関係を構築するためにコミュニケーションをとる
- ・積極的に話しかける

15

今後の課題

- ・学校側との連携強化
- ・数学以外の教科にも挑戦する
- ・メンバー間の連携強化
- ・参加メンバーの把握

16

B中学校での取り組み

17

B中学校の場合

1. 活動の概要・・・毎週金曜日に1時間～1時間半の放課後学習支援。学生側の授業に使用する資料も作成。
 授業者1名とサポーター 5名の計6名
 学習会終了後の生徒との個別質疑応答
 主にB中の図書館で3年希望者を対象
2. 行った教科・・・国語(現代文2回、古文1回、漢文1回)、英語3回、数学3回

18

学んだこと・得たもの

- 生徒側の立場で分かりやすい資料を作成する技術
- 生徒間での教えあいの大切さ
- 授業後に行う反省会(10分程度)
- 事前準備や教材研究の大切さ
- 前提として、生徒の学習意欲の向上を目的としている
- 毎回の授業の中で生徒のニーズを聞き、それに沿った授業資料作り

19

活動を行う上で今後の課題

- 分からない生徒や私語をしてしまう生徒への対応
- 質問したいが出来ない生徒などへの対応
- 学生と生徒との壁を作らない
- 数学において習熟度にバラつきがある

20

教材作成にあたっての工夫点

- 生徒の習熟度に合わせた教材を作成する
- 難しい専門用語を使わない、また説明を加える
- プリントの枚数は2枚程度にまとめる
- 教材研究に時間をかけ、内容を把握する

21

まとめ1: 学生が得たもの・学んだもの (参加形態による特徴)

<個別学習支援型&授業補助型> (A中の場合)
 個々に応じた学習支援の方法を学ぶことができる。生徒とのコミュニケーションの取り方を密に学べる。(それが、生徒側の安心感にもつながっているという実感)

<授業実践型&個別学習支援型> (B中の場合)
 教材づくりを通して、教材の作り方・授業の組み立て方・マネジメントの仕方を実践的に学ぶことができる(教職希望の学生にとっては実習前の貴重な機会)。また、学生自身が主体的に動く力を身につけることができる。

22

まとめ2: 学生が得たもの・学んだもの (全体的に共通して実感している効果)

<学習ボランティア活動の効果(学生側)>
 教職希望であるかどうかに関わらず

- 教員、生徒、関係者の方々との交流によって、対人関係スキルが身につく。
- 視野が広がる

23

今後の課題

<学生側>

- 生徒のやる気を引き出す工夫を検討し続ける。
- 分かる楽しさを知ってもらえるように工夫していく。
- 後輩へどのように引き継ぎしていくのか。

(さいごに)
 ・学生にとって意義のある「学習ボランティア活動」を、さらによい活動にするために、学生へのサポート体制のあり方、環境づくりを検討していく。
 ・生徒側、学校側にとっての大学生による「学習ボランティア活動」の意義と課題を明らかにする。

24

参考文献・引用文献一覧

- ・澁谷拓巳・原田耕佳・廣倉由佳・宮本翔吾・飛田航・後藤武俊「平成27年度『東北大学学校ボランティア』活動報告」『教育ネットワークセンター年報』16、2016年、pp.91-101。
- ・姫野完治「ボランティアの活動形態による教職志望学生の学習効果」『教育方法学研究』32、2006年、pp.25-36。
- ・姫野完治「段階的教育実習による教職志望学生の成長観の変容」『秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要』32、2010年、pp.153-165。
- ・瀬戸和也「大学生による地域の学校支援活動の組織化に関する研究」報告(その1)―平成23年度「地域の小・中学校における学習支援ボランティア活動」の現状と課題―」『静岡文化芸術大学研究紀要』13、2012年、pp.105-108。
- ・入江直子「『学校ボランティア』10年の歩み」『神奈川大学心理・教育研究論集』35、2014年、pp.99-236。
- ・板根健二「学校ボランティア活動の実態と課題」『香川大学教育実践総合研究』13、2006年、pp.15-22。

25

参考・引用資料、備考

- ・文部科学省生涯学習政策局長・文部科学省高等教育局長・厚生労働省雇用均等・児童家庭局長・厚生労働省社会・援護局長「学習支援における学生ボランティアの参加促進について(依頼)」2016年2月10日。
- ・文部科学省生涯学習政策局長・初等中等教育局長決定「学校・家庭・地域連携推進事業費補助金実施要領(学校を核とした地域力強化プラン)」2015年3月31日(2016年3月31日一部変更)。
- ・「子どもの貧困対策における生活困窮世帯の子どもの学習支援等」生活困窮者自立支援制度全国担当者会議資料4-2、2015年9月14日。

※本報告は「平成28年度大学まちづくり政策形成事業」(酒田市)による研究成果の一部である。

26

■参考文献・引用文献一覧

- ・姫野完治「ボランティアの活動形態による教職志望学生の学習効果」『教育方法学研究』32、2006年、pp. 25-36。
- ・姫野完治「段階的教育実習による教職志望学生の成長観の変容」『秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要』32、2010年、pp. 153-165。
- ・入江直子「『学校ボランティア』10年の歩み」『神奈川大学心理・教育研究論集』35、2014年、pp. 99-236。
- ・厚生労働省「子どもの貧困対策における生活困窮世帯の子どもの学習支援等」生活困窮者自立支援制度全国担当者会議資料4-2、2015年9月14日。
<http://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000097949.html> (2016/12/20 閲覧)
- ・文部科学省生涯政策局長・初等中等教育局長決定「学校・家庭・地域連携推進事業費補助金実施要領(学校を核とした地域力強化プラン)」2015年3月31日(2016年3月31日一部変更)。
- ・文部科学省生涯学習政策局長・文部科学省高等教育局長・厚生労働省雇用均等・児童家庭局長・厚生労働省社会・援護局長「学習支援における学生ボランティアの参加促進について(依頼)」2016年2月10日。
- ・阪根健二「学校ボランティア活動の実態と課題」『香川大学教育実践総合研究』13、2006年、pp. 15-22。
- ・瀬戸和也「大学生による地域の学校支援活動の組織化に関する研究」報告(その1)ー平成23年度「地域の小・中学校における学習支援ボランティア活動」の現状と課題ー」『静岡文化芸術大学研究紀要』13、2012年、pp. 105-108。
- ・澁谷拓巳・原田桃佳・藤倉由佳・宮本翔吾・飛田航・後藤武俊「平成27年度『東北大学学校ボランティア』活動報告」『教育ネットワークセンター年報』16、2016年、pp. 91-101。

※A大学およびB大学における収集資料および参考文献・引用文献は、第4章を参照のこと。

<資料>

資料 1 : 「中学生対象英語力パワーアップ講座」の様子

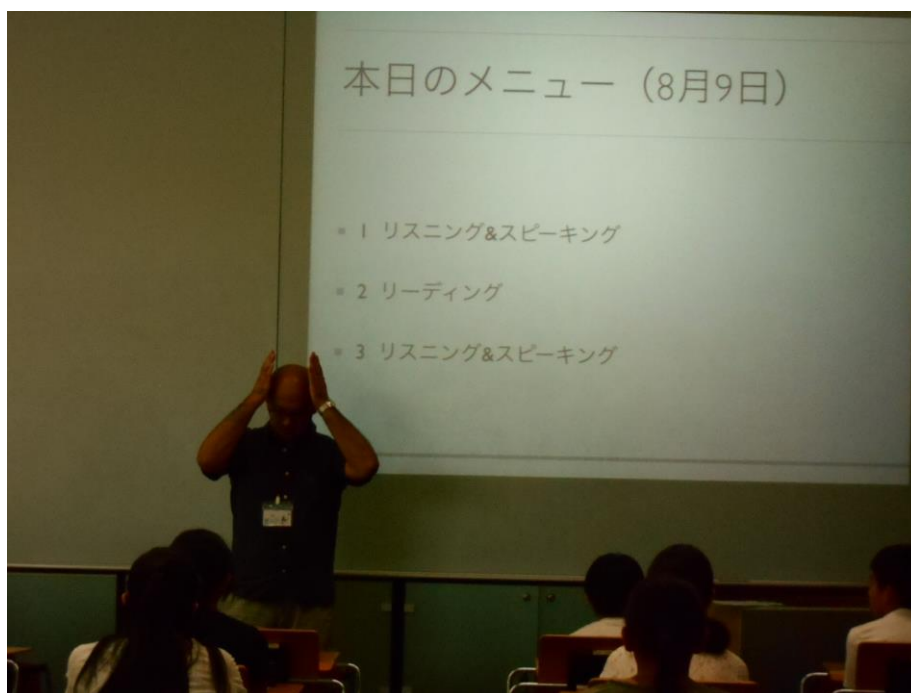
【写真 1 講座の風景①】



【写真 2 講座の風景②】



【写真3 ジェスチャーを交えながらの講座】



【写真4 既習の文法から英語の楽しさを学ぶ】



資料2：「放課後学習支援」の活動風景

(1) A中学校における活動風景

【写真1 自己紹介の様子①】



【写真2 自己紹介の様子②】



【写真3 コの字型自学学習におけるサポートの様子①】



【写真4 コの字型自学学習におけるサポートの様子②】



【写真5 グループに分かれての自学学習におけるサポートの様子①】



【写真6 グループに分かれての自学学習におけるサポートの様子②】



(3) B中学校における活動風景

【写真1 開講式】



【写真2 挨拶をする学ボラメンバー】



【写真 3 活動の様子】



資料 3 : 第四中学校の活動において学生が作成した「授業案」の一例

(1)

国語の授業案

授業者 金田直

パワーアップスクール第1回「国語」文の組み立て・品詞

㊦主語・述語の関係

「何がーどうする」「何がーどんなだ」「何がー何だ」

「何がーある」の関係

↓例…「花が咲く」「気温が高い」「彼は先生だ」

「本がある」

㊧修飾・被修飾の関係

「何が」「いつ」「どのように」など、多文節の内容を詳しく説明する文節と説明される文節の関係

↓例…「美しい花がたくさん咲いた」

㊨並立の関係

2つ以上の文節が対等に並んでいる関係

↓例…私はりんごとみかんが好きです。

㊩補助の関係

後の文節が前の文節に補助的な意味を付け加えている関係

↓「馬が走っている」「本に書いてある」

練習問題

ア ー部の文節とー部の文節の関係はなんですか

① ノートと鉛筆をカバンに入れた。 ()

② 涼しい風が吹く。 ()

③ 今年の夏はとても暑い。 ()

④ 勇気を出して試してみる。 ()

イ ーの述語に対する主語を選びましょう

① やってもやっても毎日たくさん宿題がある。

() ()

② 今日は夕焼けがとてもきれいだ。

() ()

③ 彼女は私の大切な友人だ。

() ()

④ 昨日高速道路で大きな事故が起こった。

)

)

問題の解答・解説

㉞ 1、㉞並立の関係

↓カバンに入れたものを並べて書いてある。並立の関係にある文節は、言葉を入れ替えても意味が変わらない。

2、㉠修飾・被修飾の関係

↓「涼しい」という文節は、「風」を詳しくしている。

3、㉡主語・述語の関係

↓「夏は―暑い」は「何が―どんなだ」の関係である。

4、㉢補助の関係

↓「みる」は「試して」に補助的な意味をつけ加えています。

㉠ 1、宿題がある「何が―ある」の関係

2、夕焼けがきれいだ「何が―どんなだ」の関係

3、彼女は友人だ 「何がー何だ」 の関係

4、事故が起こる 「何がーどうする」 の関係

(2)

数学の授業案

授業者：須藤洋祐

パワーアップスクール第二回「数学」一次関数

1. 一次関数について

(1) 一次関数の式… $y=ax+b$

例) 変化の割合が 2、切片の数字が 5 の時の一次関数の式は
 $y=2x+5$ となる

(2) 一次関数の基本計算

例) 一次関数 $y=2x+5$ について x の増加量が 3 のとき、 y の増加量をもとめなさい
求め方… (y の増加量) = (変化の割合) \times (x の増加量)
 $=2 \times 3=6$

(3) 一次関数の式の求め方

例1) 変化の割合が 5 で、 $x=1$ のとき、 $y=6$

…変化の割合は 5 なので $y=5x+b$

$y=5x+b$ に $x=1$ 、 $y=6$ をそれぞれ代入すると

$6=5 \times 1+b \rightarrow b=1$ となる。つまり答えは $y=5x+1$

例2) $x=-5$ のとき $y=1$ 、 $x=2$ のとき $y=-6$

…変化の割合= y の増加量 / x の増加量

$$a = -6 - 1 / 2 - (-5) = -1$$

$y=-x+b$ に $x=-5$ 、 $y=1$ を代入

$1=5+b \rightarrow b=-4$ となる。つまり答えは $y=-x-4$

2. 基本問題

(1) 次のア~ウのうち y が x の一次関数であるものをすべて記号で答えなさい。

ア. 80 円の切手を x 枚買って、500 円出したときのおつり y 円

イ. 1 辺が x cm の正方形の面積 y cm²

ウ. 時 5 km で x 時間歩いたときの進んだ道のり y km

それぞれ x 、 y の関係を式に表すと

ア. [] イ. [] ウ. []

答え []

(2) 次の一次関数の式を求めなさい

ア. 変化の割合が - 4 で、 $x=1$ の時 $y=-7$

[]

イ. $x=1$ のとき $y=1$ 、 $x=4$ のとき $y=10$

[]

(3) 水そうに 90L の水が入っている。毎分 6L の割合で排水し、水そうをからにする。排水を始めてから x 分後の水そうに残っている水の量を y L として、次の問いに答えなさい。

ア. y を x の式で表せ。

[]

イ. y は x の一次関数と言えるか。

[]

ウ. X の変域を求めよ

パワーアップスクール数学 第二回

1. 基本計算

$8 - (4 - 7)$	$-4 - (-6)$	$\frac{1}{2} + \frac{2}{5} \times \left(-\frac{7}{4}\right)$
$4xy \times (-3y) \div 6xy$	$3xy^2 \times 4x \div 2xy$	$(a - 2)^2 - a(a - 4)$
$(x - y)^2 + 2x(x + y)$	$3(2x + y) - 5(x - 3y)$	$\sqrt{45} - 4\sqrt{3} - \sqrt{20} + \sqrt{12}$
$(\sqrt{6} - 1)(\sqrt{3} - \sqrt{2})$	$(3\sqrt{3} - 2)(\sqrt{3} + 1)$	$\sqrt{6}(\sqrt{3} - 4) + \sqrt{24}$
$\sqrt{12} + \sqrt{3}(\sqrt{6} - 3)$	$\sqrt{45} - \frac{10}{\sqrt{5}}$	$\frac{21}{\sqrt{7}} - 2\sqrt{28}$

(3)

英語の授業案

授業者 本間亮平

学習ボランティア 英語 第2回目
—不定詞(3つの用法)—

1つ目「…するために」の意味で動作の目的を表す → 副詞的用法

例) I come to school to study English. 私は勉強するために学校に行きます。

・動作 → 学校に行く ・目的 → 勉強するために

I get up early to run in the park. 私は公園を走るために早く起きます。

・動作 → 起きる ・目的 → 公園を走るために

*「…するために」の部分が前にくることも！

例) To run in the park, I get up early. 公園を走るために、私は早く起きます。

日本語の意味は変わらないが、コンマ(,)を忘れずにつけよう！

2つ目「…すること」の意味で主語(I, You, He, It など)や名詞(人、もの、こと)、動作

の目的語の働きをする → 名詞的用法

例) To study math every day is hard. 数学を毎日勉強することは難しい。

・主語 → To study math every day(数学を毎日勉強すること)

I want to play basketball today. 私は今日バスケ(バスケをすること)がしたいです。

・動作 → 好き ・動作の目的語 → バスケをすること

3つ目「…すべき」「…するための」の意味で名詞(人、もの、こと)と代名詞

(She, He, It など)を説明する → 形容詞的用法

例) I have a lot of homework to do. 私はすべきたくさんの宿題がたくさんあります。

・名詞 → 宿題 ・どんな宿題? → すべき

I don't have time to read a newspaper. 私は新聞を読むための時間がありません。

・名詞 → 時間 ・どんな時間? → 新聞を読むための

—前置詞—

前置詞は名詞(人、もの、こと)や代名詞(She, He, It)の「**前に置く語**」のことです。名詞と代名詞とセットになって、「**時間**」「**場所**」「**方向**」などを表します。代表的な前置詞を見てみよう！

前置詞	意味	例	日本語
at	～に	I stayed at a hotel.	私はホテルに泊まりました。
in	～の中に(～に)	Tom is in his room.	トムは彼の部屋に(中に)います。
on	～の上に	A cat is on the table.	ネコがテーブルの上にあります。
under	～の下に	A cat is under the table.	ネコがテーブルの下にあります。
from	～から	I took a train from Tokyo.	私は東京から汽車に乗りました。
to	～へ	He walked to the station.	彼は駅へ歩きました。
of	～の	I'm a member of the baseball team.	私はその野球チームのメンバーです。
between	～の間に	She sat between two cats.	彼女は2匹の猫の間に座りました。
with	一緒に	I went to America with my friends.	私は私の友達と一緒にアメリカに行きました。
over	～の上に	A cat jumped over the gate.	ネコが門を飛び(の上を)越えました。
around	～の周りに	The moon turns around the earth.	月は地球の周りを回ります。

練習問題 1

—不定詞(3つの用法)—

()内の語を並べ替えて英文を完成させましょう。また、完成した英文が名詞用法・形容詞用法・副詞用法のどれであるか()に書きましょう。

1. 私は本を借りるために図書館に行きました。
(to/the library/I/to/borrow/books/went). () 用法)

2. よく眠ることは、私にとって重要です。
(me/well/to/important/is/for/sleep). () 用法)

3. 私はするべき宿題がたくさんあります。
(have/homework/to/a lot of/I/do). () 用法)

4. 私は食べるための食料が必要です。
(some/I/to/need/food/eat). () 用法)

5. 彼に会うためにそこに行ったのですか？
(him/you/there/did/go/meet/to)? () 用法)

6. 私の趣味は映画を見ることです。
(is/movies/watch/my hobby/to) () 用法)

7. 彼は何か飲み物をほしがっている。
(wants/he/drink/something/to). () 用法)

練習問題2

—前置詞—

()内に適する前置詞を書きましょう。

1. 私は今、海で泳いでいます。

I'm swimming () the sea now.

2. 私は毎朝7時に起きます。

I get up () 7 am every morning.

3. ゲームをしに、私の家に行きましょう。

Let's go () my house to play the video game.

4. 私は山形の出身です。

I'm () Yamagata.

5. テーブルの上に一本のペンがあります。

There is a pen () the table.

6. 私はそのバスケットボールチームのメンバーです。

I'm a member () the basketball team.

7. 私は毎日友達と一緒に学校に行きます。

I come to school every day () my friends.

8. 深海(海の下)にはたくさんの魚がいます。

There are a lot of fish () the sea.

9. その川は2つの町の間を流れる。

The river runs () two towns.

10. 山を越える(向こうに)と、町がある。

There is a town () the mountain.

11. 私たちは火を囲んで(周りで)座って、学校生活について話した。

We sat () the fire and talked about school life.

平成 28 年度 大学まちづくり政策形成事業
研究成果報告書

酒田市における放課後学習支援に関する調査研究

平成 29 年 2 月発行

研究代表者 國眼真理子
東北公益文科大学 公益学部公益学科